

に於ける料理業者は、人口千人につき一〇・七%、ハンブルグは、九・六%、キールは五・四%となる。現今にては、伯林に於て、人口百六十七人に對し、一軒の料理店を有する割となれり、ハンブルグは、人口百七十五人に對し、キールにては、人口四百五十五人に對し、共に一軒の料理店を有する割合なり。右の外に尙は數多の瓶入麥酒小賣店あり、其他工場、兵營等に造られたる設備あるを忘るべからず、斯くて「アルコール」性飲料は、潮流の如くにして國民の裡に注がれつゝあるなり。

斯の如く「アルコール」濫用著しき結果、其弊害の恐るべきことも當然なり、試に其刑事上の出來事を見るに、千九百五年度に於て、伯林市に於て酩酊のために警察の手にかけしもの、男子五千四百八十六人女子五百六十人あり、千九百六年に於ては、男子五千百十四人女子五百五十三人あり。然れども此數は只街道上に於ける酩酊者の一部分に過ぎず、上流社會の人が、過飲せし場合には、馬車にて其住宅に届けしむることを得べし。

近來、自制力缺乏し、思慮の力減弱せる結果處罰せらるゝものゝ數は増加せり。これ即ち「アルコール」飲料の結果なり。

プロリヨツ、エンゼーなる刑罰所の醫家ドクトル、ペール氏によれば、三萬二千八百三十七人の囚人中、一萬三千七百六十六人(四一・七%)は飲酒家にして、就中六千四百三十七人は、常習性飲酒者にして七千二百六十九人は、一時性飲酒家なりしと云ふ。犯罪の種類に就て見るも、「アルコール」が、多大の感作を及ぼせることは明瞭なり。

ヒルシユフェルド氏は、五千百六十五人の重犯罪者の五十%は土曜日の夜より、月曜の夜に至る間に、犯罪行為ありしものにて、これは「アルコール」性飲料の影響を受けたるものなることを證明せり。實に伯林に於ては、年々少くとも一萬の人は、此「アルコール」の爲めに法律に問はるゝなり。「アルコール」の力、洵に驚くべし。

右の如く、「アルコール」飲料の爲めに多大の損害を刑事上に於て受けつゝある外に、健康を害せられつゝあるものゝ數は蓋しまた甚しきものあり。「アルコール」が

身體各部の器官に障礙を及ぼすことは今や己に論なきところなり。ブレイメンのデルブリュツタ氏によれば、成人の全数の一〇％は、慢性「アルコール」中毒に罹れりと云ふ。

伯林の病院年報によれば、筋「ロイマチス」、坐骨神経痛、末梢性神経病等の疾患が、「アルコール」濫用のために發したるものたることを證せり。神経衰弱症に對しても、「アルコール」の感作は頗る大にして、或は原因となり或は増悪せしむるなり。

シャロットテンブルヒのグラウツ氏は、同地の病院に於て千九百四年度にありて千三百三人の男子患者中、二百七十一人即ち二〇％は、飲酒者なりし事實を報告せり。

「アルコール」が疾病の原因となる外に、吾人はまた諸種の疾病が、「アルコール」の爲めに其經過に不良の影響を及ぼすことを知れり。飲酒者に現はるる所の肺の炎症性疾患が、屢々死の轉機をとることあるは、確なる事實なり。これ即ち「アルコール」が早く心臓の變化を惹起するが爲めなり。

「アルコール」の爲めに心臓病を惹起し兵役に堪えざるもの、數は蓋し少なしと云ふべからず。伯林のポアス氏は食道癌の四〇％は其原因を「アルコール」に歸せしむべきなりと云へり。

ハムブルグ市の醫家ドクトル、ノンネ氏は、同市「エツペンドルフ」病院（同市最大の病院なり）に於て、年々八百人の飲酒者を處置し、其中二百四十人は、譫妄性のものなりと云へり、同市に於ては右の外尙ほ大病院あり。故に此等の病院に於て處置せらるるものを加ふれば、少くとも年々、右の倍數は、同市立病院に於て處置せらるるものと云ふべきなり。

最近二十五年以來、「アルコールismus」のために、入院を要する患者の數は驚くべく増加し、人口の増加は三分の一なるに、同患者は、實に五倍の多きに至れり。疾病保險金庫が受くるところの影響の著大なる、以て察するに足る。

「アルコール」業者の結核死亡率は、また驚くべき多大にして、二七八％を算し、他

の職業者の結核死亡率一三%に比すれば、二倍以上に上るなり。

ウイースバーデン市のドクトル、ラクエー氏は、獨逸國中の飲酒患者の全數は、三十萬あり、この爲めに普通病院及び精神病院に於て、費さるゝところの總額は、年々一億萬馬克を下らずと云へり。巨額實に驚くべし。

「アルコホール」と風俗壞亂が相俟ちて其惡習を流し行くことは、今も昔も、西も東も變らざるなり。賣春婦と「アルコホール」は相親める夫婦なり。相離れては有難くなし。人若し伯林市の街頭を歩みて多數の赤き燈のきらめくを見れば、これ即ち「アルコホール」及び風俗壞亂の營地なることを知るべし、風俗壞亂及び花柳病の豫防及び撲滅法は、同時に「アルコホール」撲滅法を講せられざる限りは、到底不可能の事業たるを免れず。

「アルコホール」の害毒は右にて盡きたりと云ふべからず、日々の生活に受くる處の禍害警へば、自動車、汽車等の慘害が「アルコホール」に歸因せること多きは、日々目撃

せらるゝ處の事實なり。月曜日に外傷の如き事實もこれを證すべし。

料理店の許可を制限することは、酒害防禦の目的に向つて價值あることなり。然るにブローイセンの各都市に於ては、料理店開設は、自由なり、これ各司政者が「アルコホール」に關する智識を缺くが故なり。

酒害防禦策を講せらるゝに方り、第一注意を拂はる可きことは、教育を受けたる人が、其義務を果さることなり。斯かる上等社會に立てる人々が飲酒の風俗をして勢力を保たしめ居るなり。幸にして其中に酒害の恐るべきことを知る人あるも自ら語りて言ふ余自らは多く飲まず、高々麥酒の一杯か二杯のみと此一杯か二杯かが中々疑はし。彼等が用ふる火酒、麥酒、葡萄酒の量を一年に涉りて積らば節酒の價值が疑問となるべし。

「アルコホール」問題の眞髓とする處は、一日に二杯三杯の麥酒にて満足せしむると言ふにあらずして、獨逸の國民が受けつゝある酒害を如何にして救ふかと言ふことにあ

り。上流社會に立てる人々が、酒害問題は決して各國人の問題にあらず、社會問題として或は人類問題として講究し且其防禦の策に預らば其功果の見るべきものあるは疑ふべからず。社會に害を與ふるものは、勞働者の手にする一瓶の燒酎にあらずして、實に上流社會の飲酒習慣にあり。

慧眼なる獨逸皇帝は、既に彼の國民がうけつゝある酒害の慘狀を知れり、此故に帝は、大學生に向つて酒精に關する講話をなせしこと一再ならず、帝の心痛も尤のことなり、レ氏は帝が千九百十年十一月二十一日ミュルキクの新海軍兵學校の入學式の席上にて述べたる「アルコホール」問題の講話を引用せり。

獨逸衛生局の一年の豫算額は、八十八萬五千馬克なり。若しそれ其中より、只二萬馬克(五%)を投じて「アルコホール」防禦のために費さば、其効果の見るべきもの如何に多からんものと、三歎するものもあり。政府の罪か、抑もまた社會の罪か、西も東も、政府の香氣さに齒痒ゆく思ふ情は同じと見ゆ。獨逸の衛生局には、榮養法課及

び防疫部の二課あり、何れの課に於ても、「アルコホール」問題は各處置せらるべきものなり。事は只それのみに止らず獨逸國には、衛生顧問官なるものあり、學者、衛生學者、其他實際生活上に智識ある人々等此官職にあり、人頭實に九十を算するに、確かに「アルコホール」反對者と認めらるゝは、ミュンヒェンなるプロフェツソール、フォン、グルーベル氏のみにあらずやとレ氏痛言せり。

保險廳に於ても、今日に至るまで何事も成さざる處あり、或は僅かに成せる處あり。千八百九十七年より、千九百四年に於て、保險廳が、結核防禦の爲めに支出せしもの實に二億千百萬馬克を超えたり、これ實に感謝すべきことなり、然れども酒害防禦の爲めに投せられたるは、僅かに數十萬馬克に過ぎず。

國立保險廳は、「アルコホール」が、禍災の原因として、預つて力あることを、幾度か反復して稱ふるに拘らず而かも其功少き所以のものは、職業に従事せる人々が、「アルコホール」に關する智慧の缺けたるに基く。坊間稱へて言ふ、節酒はそれ程害なしと。

これ飲酒家に愛して用ゐらるゝ金言なり。

人若し市立病院の支出額を通覧するの機會あらば、必ずや其葡萄酒、麥酒、「コンナク」等に支拂はるゝ支出の莫大なるに一驚を喫すべし、この大量の飲料は年々常習性飲酒患者のために使用を餘義なくせらるゝものに外ならざるなり。

近頃ブロイセンに於て、喜ばしき運動の始められたるを見る、内務大臣は、布令を地方長官に送達して、各他方に於ける節約運動の發達を徵せんことを希望せり。

獨逸の首都柏林市は、「アルコホール」防禦事業に對して全然拒絶せり、然れども貧民救済の爲めに年々二千百萬馬克を支出するの止むなきに坐せるは、かくれもなき事實なり、豈んぞ知らむ、このために費されたる三分の一は、「アルコホール」に原因せるものに對してなるべきを。若し柏林市にして、十萬馬克を「アルコホール」防禦に投せしならば、他の諸種の支出が如何に減せらるべきかを悟るに難からざるべきに。知るべし、主なる傳染病のうち、「アルコホルismus」ほど輕きはあらず、而してま

た、これ程防禦し易きものあらざるを、「アルコホール」防禦を講せずして、結核防禦を策し、花柳病防禦を企つるは、いとゞ困難なることなり。此等の豫防法は、「アルコホール」病豫防法と共に結んで行はれざるべからず。

ハムブルグには「グッテンブレル」と稱する會あり、五萬の成人と二萬の青年とを會員とし、「アルコホール」防禦の爲めに少からざる成績を擧げつゝあり。其他に宗教上の會にて、「ブラウエ、クロイツ」、「クロイツビュンドニス」と稱するものあり、尙社會黨の組織せる労働者禁酒組合と云ふものあり。

此等の會は何れも相應に効果を收めつゝあるなり、上流の人々が、此等の事業の爲めに力を借すは、當然の義務なるに、獨逸國は今日は、全くこの事を闕く、歎すべし。財寶を積んで金に飽ける人は、如何にして有用に金子を使ふべきやを知らざるなり。

嗚呼歐洲戰

これは歐州戰爭の突發せし當時ものせしもの、一部分なり。今特にこの欄に收むることせり。

一 獨逸軍艦評判記

●本年七月の初めチャルス、ボス氏獨逸軍艦に關する批評を試みた。同氏は佛人である。興味ありと信じ其概要を紹介せん。

●獨逸の軍艦は敵國にとつては危險の極めて少ないものである。海軍艦隊の組織もそんなに進歩して居ない。時々禍厄の起るに徴しても明である。砲術はそんなに上達したものは言へない。軍艦砲とても三〇・五「センチメートル」が最も大なもので其他は大抵二八「センチメートル」である。之に反し英國の軍艦は十艦毎に三四・三「センチ

メートル」の砲を有して居る。

●獨逸の海軍は、最近十五年足らずの間に世界で第二位を占めるまでに發達した。處が獨逸の海軍軍人は獨逸人が信ずる程に精練したもので無い。こんなことを言ふと獨逸人の氣に入らぬことは勿論だけれども、眞實の處である。

●砲彈も英佛のものに比較しては餘程もろい。

●獨逸の海軍軍人が尙ほ一段の進歩を要すべきことは勿論である。英國側にとつては、獨逸の弱點は聊か意を強ふするに足る處であらう。

●陸軍にしても右に似て居る。獨逸が頻りに陸軍を擴張し來りたる結果、露國も、佛國でも矢張陸軍の擴張を實行して來た。

●埃多利、匈牙利は、軍隊擴張の勢力弱く、伊太利に到つても矢張大した事は行ひ得ない。先づ佛國にとつては安心して宜い。

●獨逸側の方では右の評判記に對して言ふ。成る程議論は立派な議論であるが、我等

は丁度右の議論を佛國の軍隊に當てはめたら宜いと思ふ。佛國の軍隊には二百萬の洗足の軍人があるでは無いか。海軍ではB彈丸を用ひて居るでは無いか。おまけにそれすら彈丸庫に缺けて居ることがあるでは無いか。歐州の新聞は殆んど佛國海軍の禍厄に關して定まつた欄を設けて置く必要がある位では無いか。この點に於ては佛國軍は獨逸軍の「レコード」破りを致して居る。今に御覽、事實が證明を致します。其時こそ佛國の軍隊は獨逸側で笑ひ草の種となるでせう。

●成る程双方の議論を聞いて見ると随分面白い。何れの國でも自國のものが一等優れりと信ずるのが常である。實驗によつて愈其優劣が決せらるゝ。此處須らくは面白き見物でござる。

二 「クルップ」

エッセンのフリードリッヒ、クルップと言へば、既に世界の人が知つて居る名高い

武器製造所である。最近にエッセンの年報が出版された。事節柄興味あると信じザツと紹介して見ませう。

現今「クルップ」で就業せる者の人員七萬九千六百四十七人を數ふると言ふのだから、何様大仕掛であることが想像し得らる。その賃金表は、一寸興味のあることである。昨年度の賃金の割は一日一人に五・九一「マルク」(日本の金で約三圓)此賃金の割合は、「クルップ」創立以來勿論年と共に増して來た。千八百五十三年度の一日一人の賃金表は日本金の約六十五錢であつた。

器具製造部の職工丈けでも、八千五百人あると言ふ。

石炭消費高は、百五十三萬噸、其中鑄鋼所丈けで百萬噸を費すと言ふ。「コークス」の消費高百五十五萬八千噸。「ブリケット」四萬噸。水の使用量は鋼製造だけでも千六百二十二萬七千八百六十四「クビクメーター」に上つて居る。

交通運輸の爲めにエッセンの三停車場と「クルップ」と連結せる線路あり。日々「クルッ

プ」の爲めに運轉せる車數は約五十個を算すると言ふことである。

「クルップ」發着の電報數は年々三萬餘に達す。愈本國が戰爭を致すと言ふ騒ぎになつたので現今は一層忙しく武器の製造に熱中して居ることであらう。

三 「カイゼル、サイルヘルム、カナール」

●「カイゼル、サイルヘルム、カナール」は獨逸國キール軍港とエルベ川の下流との間を交通して居るのであるが、これは千八百八十七年より同九十五年に涉つて完成した。其工事費は一萬五千六百萬「マルク」である。長さ約百「キロメートル」、深さ九「メートル」、水面六十七「メートル」。

●此「カナール」は申すまでもなく、戦時に際し、東海より北海に涉る航海路を短縮する目的で開通されたのである。軍艦の船體が其後増大したる爲めに「カナール」の擴張を要し、千九百七年此事が議會で可決せられ其年愈々其擴張に取掛つた。

● 僕偶々此「カナール」を蒸汽に乗じて航し、その擴張工事を見たのであるが、何しろ「バナマカナール」若しくは「スエスカナール」等と異り、氣候其他の關係不良ならざれば、其工事は右の兩「カナール」に對し容易なることは申すまでもなし。

● 此擴張工事は「カナール」を深くすること、廣くすることの外に其方向をも便利にするのが目的であつた。作業中も船の通行を妨げぬやうにしたる爲め工事は幾分難事であつた。

● 「カナール」擴張の結果、只今では深さが十一「メートル」。「カナール」底面四十四「メートル」(元は二十二「メートル」、水面百一・七五「メートル」になつた。

● 此「カナール」擴張費は二億二千三百萬「マルク」で、最初の工事費の約二倍にも近い額である。

● 「カナール」開通以來、船舶の交通は段々増して來た。交通の初年に航海せし蒸汽船の數は、七千五百三十一個、これが五年後には一萬二千に上り、七年目(千九百三

年乃至四年)には初めての純收入(工事費を差引したる額)五萬七千「マルク」に上つた。千九百十二年には百二十萬「マルク」に達した。最近交通せし蒸汽船の數は五萬七千に上つたと言ふ。

● 交通の蒸汽は獨逸船の外にデネマルク、瑞典、露國等のもので、其半數は此等外國の蒸汽船であると言ふ。

● 此「カナール」を交通する爲めに、スカゲンに達する航路は三十時間乃至四十時間を節約し得ると言ふことである。「カナール」通過は一時間五海上「メートル」を超過する能はざる規定なれば、約十一時で「カナール」を交通し得るのである。

● 何は兎もあれ右の擴張によつて戦時に於ける應用上非常に便利となつた。小形の軍艦は七時間で「カナール」の通過をなし得ると言ふ。軍艦は一時間十五「キロメートル」の速度にて航行し得るのである。

● 擴張は致されたれども何人も戦時に此「カナール」を使用することを希望せず。

何時までも平和時の交通に便ならしめんことを望みたりしに、今は殆んど戦時専用の「カナール」とはなりぬ。曩年自ら此「カナール」を航し轉た感慨の止むなきものあり。即ち此「カナール」記を草する所以である。

四 孤立せる獨逸

●獨逸は世界に友を有せずとは獨逸人自らも常に口にするところであつた。これが愈事實となつて現はれ、今は各國軍包圍の中に居る。白利義は殆んど獨逸軍の手に歸したと雖も、南に佛軍あり。東に露軍あり。如何に勝ちほこれる獨逸軍と雖も、そう早くは片づけてしまふわけには行かまい。獨逸軍の著しき損害も一度ならず新聞で報せらるる。

●ビスマルクは大豪傑であつたけれどもそれでもプロイセンを世界に紹介するには至らなかつた。世界的獨逸となつたのは實に近い年月のことである。獨逸が世界政策を

とり始めたのは舊い話ではない。最近の獨逸外交は實に得手に帆を擧げる勢であつた。

●東西南北から集り來る獨逸の世界外交はいつでも良好なものであつた。そこでカイゼルのナポレオン魂は一層劇しくなつて來つゝあつたのである。

●獨逸の商人はエライものである。英國などにも澤山に居る。僕は多くの商人と會合して談笑する機會が大分あつたが、かれ等の頭には政治的外交と言ふことが深く刻まれて居る。世界政策と言ふことは矢張此等商人の頭上にチャンと宿つて居る。支那の方面も獨逸人が此頃大に發展をし出した。敏捷な人種で、拔目がないと來て居るから時節が到來すれば筈にやうに延びて行く。

●處が不幸なことには世界に友が無い。早い話が日本などでも良友では無い。獨逸の方でもナーニ青二才が位思つて居る。露佛英の獨を惡むことは今日言を要せぬ。伊太利とても獨逸に厚意は持つて居ない。スペイン、デネマルク、ポルトガル、ノルウェーの如きも獨逸の敵である。白利義は申すも愚か。

●南北亞米利加に於ても、カ^イゼ^ル黨はソ^ンなりに勢力ありとは言へぬ。

●そんなら一體何と言ふ國が獨逸に黨するのであらうか。恐らく瑞典位かも知れぬ。瑞典は露國の敵である。獨逸よりは寧ろフ^イン^ランドとの友誼の方が厚い。土耳其は、獨逸崇拜者である。奧國もあまり獨逸を蟲にすいては居ない。老帝が崩御の後は大方獨逸に對する友誼の上に變化が及ぶだらう。

●何は兎もあれ、カ^イゼ^ルの腕は世界に延びたくて堪らないのである。カ^イゼ^ルはまだく大きなことをやるであらう。好戰王として歐州の歴史をかざることであらう。

●今より四十四年以前獨逸國が幾十萬人の血を以て支拂し高價の賜は遂に今日の獨逸國を生んだのである。此間の進歩は實に大したものであつた。今日の戰爭は只に勢力の戰爭のみでは無い。商的分子を含んで居るのである。

●世界其ものは既に時代の徵證を知つて居たかも知れぬ。今回の如き世界戰爭が成立すべきことを……

●軍備の擴張は大したものであつた。文明の樂園、平和の歐洲は武器の製造に餘念なかつたのである。何の爲めの軍備擴張ぞ。一國の君主が他の君主を訪問するとヤレ兩國の平和の爲めに大功力あり、友情はこれによりて厚かるべしなど、稱へられ、有力なる新聞の記事、目立てる人の演説等が兩國の國際關係に涉り其言厚誼的に涉れば人は既に平和の徵證として叫んだ。併し斯ばかりのことですら八ヶ間敷平和呼ばりをするだけ、それだけ國際緊張の度は劇しかつたのである。

●試に英佛獨に於ける敵愾の精神を見ても如何に國民全部が他の國民を敵視して居るかと言ふことが分かる。

●此間に於ける獨逸の軍備擴張は大したものであつた。國民の自負も亦大したものであつた。獨逸は世界を征服せんことを夢みて居たと思はるゝ程であつた。

●佛蘭西の國民も亦た軍備の擴張を實行し彼の千八百七十年戰爭のかたきをうたんと志して居た。

●人は言ふ獨帝はナポレオン魂を有する戦争君主であると。獨逸側では言ふ。若し獨帝ゼルがそんなに戦争好きであるなら二十五年以上の政治を通じて何が故に平和を叫ぶ必要があつたであらう。埃國の皇太子を刺せし者の國を罰するは當然の義務と信じた獨帝ゼルの心中、寧ろ高潔なる友誼を發見するでは無いか。若し戦争の外に何かよい他の途が開けたならば獨帝カイゼルウイールヘルムは必ず宣戰を布告することを避けたであらう。と。

●獨逸の國民は既に常に口にして居た。佛は恐るゝに足らず。露國も大した勢力を有せず。英國は艦に富めども陸軍は絶無と言ふ程の勢力を有するのみ。歐洲の戦争は獨逸の勝利に歸するや疑なし。白利義、和蘭の自ら獨領に流れ來るは言はずもがなど。

●まんまと爾チう安くは買ひたくても問屋の方で卸ちやうして呉れぬ。茲暫くは獨帝カイゼル頭痛八巻の體てい。新聞の報する處では獨軍の不利、到る處に現はる。

●獨帝カイゼルは自ら軍刀を以て自ら隊伍を指揮せん爲めポツダム城を出でしとも傳へられ、一にまた既にアーヘンに出征せりとも傳へらる。

●獨逸國運の興敗一に此秋に在り。強いと威張りし國ながら、小手しらへには少々役が重すぎる。小手調べに怪我をしたり、重傷を受けては、本場の役がうまくつとまらぬ。

●何は兎もあれ。戦争の悲惨は實に想像以外である。文明の花園は今は屍骸の荒野と化しつゝあるのである。科學も、商業も、工業も停止の姿に在り。國民は貧に泣き。國は負擔の重きに泣く。

●我等は一日も早く平和の曙光の現はれんことを希望して止まないものである。

第二編 英國の卷

初めて英國へ

一 獨逸より英國へ

僕の獨逸國滞在は、強ち短かいとは言へない、國內殆んど旅行して廻つた、大都會の生活を見た外に、田舎に這入つて、土地の農家に、農夫と寢食を共にしたことも、一再ではなかつた。

風俗と習慣になれた英國の生活を止めて、他國に渉る旅の身、一面には名殘惜しけれど、一面には、又好奇心の燃え立つものあり。

英國、英國!!! 倫敦、倫敦!!! 僕は好奇心に凝り結かたまつた身を倫敦の客きやくとすることになつた。

英京倫敦は、世界の最大都市である、古い都である、世界の大商業はこゝから手を出して各國に營まれつゝあるのである。

處變れば品換る。風俗も、習慣も、獨逸に比べると、大した違いがある、これは國民の精神が異つて居る處で、興味^{興味}の在る所以である。

歐羅巴の旅に馴れた身には、初めて祖國から、歐羅巴の地を踏んだ時程の感興は起らないにしても、異文、異人種の、而かも世界の大都市に來て見れば、強ちに感興少しとは言ふべからず。人間と言ふものは、何でも歎でも、過去の經驗に照して、批評したくなるものである。厄介なものであるが、こゝがまた必要のところであるかも知れぬ。

倫敦！ 僕は果して如何なる思ひを懷いて、倫敦に向つて挨拶の言葉を呈したであらうか。

二 倫敦はこれ戰場

倫敦は、平和の戰場である、百萬の市民が、街頭を驅馳せて、生活の大戦争をやつて居るのである、自動車、電車、馬車、荷車、自轉車等が丸んで押し込めたやうに往來して居るのである、乗合自動車、電車は、何れも二階造りである。獨逸などでは二臺三臺の電車が連結されて運轉して居るが、倫敦の如く、交通の頻繁な處では、それは出來ない、二重建にしたのは、この爲めであらふ、街道の辻々には、巡査が居て、交通をさばいて居る、交叉點で甲の路を開いて居る數分間に、乙の路に連續する自動車、電車、馬車の數が幾十にも重るのであるから、其頻繁さがわかる。

其間に歩行の人間が走つて居る、倫敦で道を歩むと云ふことは、命懸けである、歩くのではない、走るのである、走るのではない飛ぶのである、自分で飛ばなければ、人から飛ばされてしまう、夕に市から歸つて、『ヤレヤレ、今日も飛ばされずに、無事に歸つて來た』と思ふ位である。

倫敦市の交通はこれ計りて無い、倫敦市の地下、數十尺の暗黒面を縦横に長い鐵道

が、快走して幾千萬の人を運んで居る。

倫敦は、舊い都である、獨逸伯林或は其他の大都市の如く整然とはして居ない、街道は申すまでもなく、家屋も其通りである。

倫敦は煙の都である、實際煙の臭が鼻から去らずして困る、倫敦市民は、空氣と共に、この臭い煙を肺の榮養としなければならぬのである。大小の古き建物が、幾百年の久しき絶えず此臭き煙を呼吸して、煤の化身となつて居る、大砲の煙よりは質が悪く、

市街の戦場は、大砲の音よりもイヤな、そしてはげしい響を發して居る、荷車の響、電車、自動車、雷の響よりも、もつといやに聞える、これに閉口するものは、倫敦の生活が出来ない、倫敦の市街戦には加はることが出来ない。

管にこればかりでは無い、倫敦名物の深霧がある、これ程不愉快なものは、蓋し多くはなからう、何しろ晝の二六時中、濃霧一度下れば、十歩の前の人の顔が見えぬ市

街の交通機關は申すまでも無く、商店と言はず、住宅と言はず燈火を點じなければ用が足せぬ。頭から壓せられる様な、何とも言へぬイヤな氣がする。

こんな光景は我國の大阪や、東京では、到底見ることが出来ない。

人類の生活、生活の戦争！ これから愈倫敦市の内部が、窺はれるのである。

霧籠むる倫敦

在歐中隨分彼地此地と歩いて見たが、深霧こめし時の倫敦市中程不愉快なるものは未だこれを見ず。予が獨逸より英國に向ひしは、ある年の二月の末であつた。そして名にて聞き及びし倫敦霧なるものを實驗した。聞いては居たが實際は考へたよりも數層不快なものである。

倫敦はさなきだに煤の都である。此濃厚な煤煙と濃霧がキツスをするのである。倫敦に在るものは日々數回襟カブラを換へねばならぬ。鼻の穴は二本立の小煙筒に化するので

ある。倫敦兒のうちには煤色にて染められざる肺を有するものは無いであらう。

倫敦の霧は日中と雖も室内に點燈を附けしめる。室内處の騒ぎでは無い。街上は宛然たる夜の光景に化する。自轉車、自動車、馬車、電車、悉く點燈する。點燈の外に始終笛音を鳴らして居る。正午の街上に而かも『一寸先きは闇の夜』を演出するのである。

此所謂一寸先きは闇の夜の街上を歩いて居ると霧とキツスをした煤の群集が、呼吸道の一部に閉塞工事を施すかの如く感じられる。十一月の頃はもつとヒドイと言ふ。これよりヒドければ交通は杜絶せざるを得ず、一寸先き行く人の顔が見えぬと言ふ。故に交通のはげしき要所々々に火を焚きて『陸上の燈臺用』をなすと言ふことである。

倫敦には原野状の大公園多數に存在す。これ煤の都に於ける自然的要求に基くためである。

倫敦の市街を見たるものは誰でも氣が附きしことと思ふ。市中に散在せる大理石の大建物も、年を経て重りし煤衣を脱する由もなく、其状態も白衣の美人が一轉して黑人に化したるが如し。あわれは倫敦兒のみならず、美はしき建物にまでも及んで居るのである。

斯くの如く陰鬱なる霧と煙の間に棲める倫敦兒に、例へば維也納兒の如き氣輕にして人好きのする氣質の缺けたるを責むるは、恐らく無理の注文であらう。英國の民が濃厚な酒を飲んで一宵の快を貪るのは自然的境遇の結果かも知れぬ。

英國には黄金光れども太陽の光なしと稱せらる。少くとも倫敦にて太陽の光りを見るは、春三、四月の交より、秋の始めにかけての六、七個月に止るであらう。黄金の光りは結構なれど之に浴して誇れるものゝ數は、貧しきも富めるもおしなべて同じ太陽の光を受け得るものゝ數に比すれば、大海の一滴とも比べ能ふであらふ。

倫敦兒は、右の期間ですら『煤攻めの苦』は免れぬ。其他の秋から春の初めに涉る

期間は之に加ふるに『霧攻めの苦』に逢はねばならぬ。『煤』と『霧』にて成立せる聯合軍に方らねばならぬ。倫敦兒は、不快なるかな。

英國に於ける獨逸人

●全英國に於ける獨逸人の數は、最近の調べによると、五萬七千六百人（其中男子三萬六千二百五十人、女子二萬三千三百五十人）を算す、これは但し全英國に在つて、何れかの業に従事せるもので、永久若くは、半永久と見做すべきである、其外に單に見物、若くは極めて短期の滞在をなすもの、數を加へると、全英國に於ける獨逸人の數は、實に十三萬八千人以上に達するのである。これに反し

●獨逸國內に於ける英國人の數は、餘程少ない、近頃の調べでは、僅に一萬八千三百十九人である。

●右に擧げし全英國に住へる獨逸人の數は數年前の統計に従つたのであるが益々増加

の傾向あり、現在は、右の數を遙に超過して居ると註せられる。斯くて、獨逸と英國との間に、經濟上の問題及び殖民問題が愈重要視せらるゝことは勿論の事である。

●英國に於ける獨逸人は果して何をなせるか、これは一寸窺つて見たい事柄である。今極めて單短に、二三の方面を紹介して見やう。他山の石、我が玉を磨くにも足らん。

●倫敦には、多數の獨逸人が居る、全英國に於ける獨逸人の事業範圍も、倫敦を代表的のものとして差支は無い、倫敦の例を擧げて其大要を示すのが便利であらう。

●倫敦に於ける獨逸人の團體、獨逸人は、共同生活によつて、研究と實際とを併用することに妙を得て居る。見給へ倫敦には獨逸人の設立せる團體は非常に多數である、數年前、二十數個の團體を總括する機關が出来て、今は同盟して、各會共同的運動をして居るのである。

●團體の性質は、其専門によつて別れて居る、例へば軍人に關する會、美術、學術、音樂に關する會（これに屬する會が、二十個以上に達して居る）、職業及び職業扶助に

關する會、慈善會、婦人會、娛樂會、遊戲體育に關する會等舉げ來れば中々のものである、其外に勿論多數の獨逸教會、多くはこれに併合せる獨逸小學校等其數は、二十數個にも上つて居るのである。

●獨逸語新聞は二個あり。一を「ロンドーネル、ゲネラル、アンツアイゲル」と稱し、他を「ロンドーネル、ツアイツング」と名く、前者は週二回發行、後者は週一回發行。

●右の新聞の外に、會自個が、會誌を毎月若くは年二回刊行する。

●倫敦には獨逸「ホテル」あり。獨逸圖書館あり、獨逸病院あり、數名の獨逸醫師の開業せるもの、獨逸藥局、獨逸料理店、獨逸演劇場、獨逸體育館、獨逸麥酒舖、獨逸書店、獨逸銀行等舉げ來れば、實に限りがない程である。

●偕、今更に歩を進めて、共同的生活より、個人生活に涉つて、獨逸人の行へる所を窺つて見やう。次の表は、全英國に於ける獨逸人の數である。

●最も多數を占めて居るものは、召使人である、これは三千四百七十人（男子）の獨

逸人を算へ、女子は僅かに、二十名に過ぎぬ。それに次で多いのは、商店員で、男子二千五百八十人、女子二百四十人、航海業に従事せる獨逸人は、可なり多い、即ち男子二千三百十人、女子十五人、「ホテル」又は料理店に働ける召使人は、男子千九百六十人、女子三百七十人、理髮業、男子千九百十人、女子四十人、裁縫人、男子千六百十人、女子四百人、「パン」商、千七十人の男子、三十人の女子、肉屋及びこの販賣に従事するもの、千二百八十人（男子）二百人（女子）、教師の數は、男子（二百九十人）よりも、女子（千百七十人）の方が遙に多い、（音樂教師を除く）。

●右に挙げたのは、極めて概要に過ぎぬけれども、其系統の整頓せることは、逆も日本人などは及ばぬ。例へば、慈善事業の模様を調べてもすぐによく解る。獨逸人の設立にかゝる慈善事業の會が、倫敦だけに十二個もある。其事業として、例へば、歸國の旅費なきものに、これを支給するとか、就職館の經營、孤兒院、慈善病院、教育院等の如きこれである。

●以上度々述べた如く、獨逸人は、規則正しい頭腦を有し、何んでも、先づ研究してかゝる、其結果佳良と言ふことであれば、これを實地に應用する、此點は、遙かに英國人に優つて居る、獨逸へ行つて見ると、政府の事業より、家庭内の生活に至るまで、其精神がチャンと一貫して現はれて居る。

●近來長足の進歩を世界の表に示しつゝあるは恐らくは獨逸であらう。我國では、社會政策と言ふものが殆んど闇の中に葬られて居る姿である。社會的經濟の問題が、一轉すると、國民の生活に大變動を起す、日本の爲政者よ、此邊に多大の計畫を致して貰い度いものである。少し世界の歴史を見ると、チャンと活きた例が、教訓を示して居る。活政治家は、活眼を開いて、活世界を見ることが出来る、日本の現状は、頻りに此活政治家を要求して居るのではなからうか。

起て、而して進め、日本婦人よ！

●獨逸は酒の國である、麥酒の故郷である。男も女も水の如くに、麥酒を飲んで、麥酒を讚美すること、此國の上に出づるものはない程である。併し一度禁酒に關する講演會、又は講習會と言ふ様なものが開かれると、男子よりも女子が、高い聴講料を拂つてまでも、聞きに来る。僕は此等の模様を自ら經驗した。其他の普通の講演にも女子が男子と同様、若しくは男子より多數に出席して、それを熱心に聞く。素より他に若干の原因はあるかも知れぬけれども、女子が男子に劣らず知識を得んと努力せることは、明かな事實である。こんなことを目撃した自分はいろ／＼のことを日本の婦人方にお勧めしたくなる。

●先づ日本の女子の生活に大革明が來なければならぬ。昔の所謂日本の女子が、更に世界的日本女子にならねばならぬ。精神生活と物質生活を論せず、大發展を要する

時代になつて来た。

●日本の禮儀、例へば婦人が言葉の数を少くし、動作を静かにし、何事も出しや張るよりは、控へ目にすると言ふが如き、これは程度の問題である。饒舌る時には男をまかしても饒舌つて貰ひたい。走る時は男を追ひ越して走つて貰ひたい。日本の婦人は終日家に居て働いて居る。そして日曜日が休めない。日本の女中などは月に一日の休みも貰へない。英國の女中を見給へ、日曜の外に大抵水曜日の午後は休んで居る。日本では主人の歸りが夜に入つて遅くなつても、女中は眠ることが出来ない。それでも翌日は同じやうに起きねばならぬ。日本の婦人が家庭で、時間割を上手に工夫して時間を節儉することを學ぶは必要のことである、日本婦人程多數時間働くものは外にないかも知れぬ。併し日本婦人程時間を無駄に過すものはまた外に求められぬであらう。

●訪問にも事務と娯樂とを別けて貰ひたい、事務の訪問に茶を出し菓子を出し、西洋の婦人ならば二三分で済ます處を三四十分以上を費すとは、あまりに時間が安すぎる。

事務用の訪問に茶などは一切廢しては如何。

●日本の婦人が家政の上に大改革を要することは勿論のことである。見よ、料理の方法、炊事室の設備、洗濯法等にどれだけ近代の日本婦人が改良を施し得たか。數へるものがないではないか。日本人は毎日入浴する清潔の民と自ら稱す。洗濯の方法、日本婦人の衣服等を見れば、茲に大改良が要る。獨逸の婦人が、家事の改良に力を用ひ、年々歳々實用と經濟と美觀とを兼ねて改良に勉め居る如き、日本婦人の學ぶべき處だと思ふ。

●日本の婦人が、科學の應用を家政に致すやうに力めることは、日々の生活上に必要なことである。日本の娘のうちに、米の飯を三種にも四種にも炊き得る人が少くはない……即ちこげた處と、過ぎた處と、出來た處と……見給へ一度獨逸婦人に飯の煮方を示してやれば、再び失策はやらぬ。即ち水と米の比例を算し、火の温度と時間を計算するからである。これは只の一例であるが、何事も科學の進歩に應じて適用するや

うにして貰ひたい。主人は洋服を着る、白下衣や襟カライの洗濯が、内で出来ないやうぢや困つた事ではないか。六かしいことでも何でも無い。清潔だと自稱する國民の中に、主人に垢の付いた襟をあてがつて、平氣で居る豪傑の細君が日本には少くない。西洋であれば、そんな女は、迎もお嫁には行けません。

●一方には又日本婦人が、健康を増す爲めに、從來の生活方法を改良せねばならぬ。これには運動、遊戯等種々の方面があると思ふが、將來生るべき日本の女子は、もつと丈夫な、もつと頑丈なものにならねばならぬ、此點の努力が、日本の婦人には缺けて居る。

●英國婦人の如く、日本の婦人に馬に乗れとは強ひぬ。舟を漕げとは言はぬ、言つたつて又出来やしない、けれども例へば水泳の如き、山登の如き、遠足の如き體育の方面に於て、娛樂を兼ねて行ふべきことが多くあると思ふ。日本で絶無だとは言はぬ。其やり方が、あまりまゝごとのである。

●日本の婦人は、歩行が不得意である、西洋婦人の足下にも及ばぬことは言ふまでもない。日本の婦人は、人形の如しと、羅歐巴の人は言ふ、美しいと言ふ又の名ではなくして、動くことが下手だと意味するのではないだらうか。

●日本の現状は、又婦人に社會的事業を要求して居る、例へば婦人が慈善の事業に力を盡すと言ふことは、婦人の先天的使命である、英國の如きは、實に其有様がよく現はれて居る。

●獨逸の婦人社會を見てもよく解る。獨逸には大小の婦人會が、數百ある。道がに進歩した處だけあつて其目的の範圍が既に餘程細密に涉つて居る。例へば婦人に關する問題一切を研究すると言ふか如き大範圍から段々分かれて、女中保護會、女權保護會、女子選舉權運動會、女子記者會、移民會、女子音樂會、兒童保護會等擧げれば、其種類は算へ盡せぬ程である。殊に其事業が極めて系統的に行はれつゝあることで、例へば毎週幾箇かの集會が行はれてごし／＼問題をさばきつゝある所は中々すばらしい

ものである。

●ある時—僕が英國で講演した折—僕は『日本の小供程行儀よく育てられて居る小供は世界でも稀であるのに最近工業の著るしい發達の結果、苦い人が不十分な工場設備のために、ごし／＼疾病に罹りつゝあるではないか、これは悲しむべきことである』と言ふ質問をうけた。成る程、西洋の商人はこんな事をチャンと詳しく知つて居る。見給へ、日本の年若い娘が年々數百數千人紡績場、織物工場等で殺されつゝあるではないか。醫學上の統計を見ても、無實だとは言へない。これなども婦人が起つて輿論を盛にし食物の改良、住居の改善勞働時間の制限等を改めるやう盡されたいものである。

●散漫なる通信を以てして、詳細に涉ることの出来ぬは止むを得ぬことである。今これを詳説するにはあまりに僕の時間が少ない。以上はほんの二三の思ひ付いたことだけを述べたのである。他日或は機を見て斯種の問題を論じて見たいと思ふ。

流行と西洋婦人

日本の諺に「女の心と秋の空」と云ふが歐洲の婦人界を見ると秋の空處ぢやない。朝改暮變、時計の針の刻むが如く次から次に變じて行く。これも矢の如く走り行く流行を追ふ婦人の存在する證據である。

一面から見ると流行程馬鹿なものはない。流行と常識とは別問題となつて居るからである。

流行は奇を好む團體によつて成立す。實際美術とか實用とか云ふものを離れて何でも奇態なものを以て流行とするやうになつた。

西洋に在るものは陳腐である。目馴れたものは流行の範圍に屬せない。そこで何でも一段懸け離れた國の風俗習慣を真似て突飛なものを造つて、奇を喜ぶ流行婦人を誘はんと勉める。

そこになると日本物は一寸應用し易い其處で商人が種々工夫をする。之は今に始まつた事では無い。併し手を換へ品を變へて日本の趣味を應用しやうとすることは今日も盛に行はるゝやうである。

流行の中心巴里及び倫敦で此頃日本服の袖を應用して何ぞか西洋人の趣味に調和させんと考案して居ると云ふことである。其結果ごんなものになるか一寸見たいものである。

支那の風俗も矢張り奇態と見らるゝ點に於てこれを應用せんと工夫して居る。色模様の衣服を工夫する場合には日本や支那の衣服が参考となる。近頃此色合を應用して或は梅色、「カナリア」鳥色、黒等の色を配合して歐洲人の趣味に合ふやうに試みられて居る。

假裝會の外には用ゐられざりし異様の上着が流行仕出したり。上着に帯を付けて胸で×形に引きしめて見たり。或は日本の帯にまねてせまい帯を後ろで山鳥の尾程垂ら

して見たり。流行と云ふもの程性質の解らぬものは無いだらう。

「キモノ」と稱する語は西洋で知らぬものはなからう。「キモノ」と稱して店頭に飾り若くは使用されて居るものは日本の着物に多少の變化を加へたもので、日本から直輸入の着物でも外國人向きに少し品を換へて仕立てゝある。例へば前を閉ぢ込めてあること、袖を變じてある事等。此等の所謂「キモノ」は「モルゲンロック」として或は假裝服として用ゐられる。

支那人は人工に足を傷つけると言つて、西洋人が常に悪口を云つて居る。其西洋人が小さい靴を造つて踵を高く細くし、自ら支那の悪習慣を利用して居ることを心附かずに居る。人間と云ふものは随分勝手なものである。

日本服は歩行の際下脚が外に見えるのが可笑しい、そして逆も大股には歩けない不實用的の服だとして笑つた西洋婦人が、此頃の流行服を喜んで用ひて居るのは一寸前の言葉に對して辻褄が合はぬ。即ち今日の流行服は下袴の極めて狭いために、多年馴れ

て来た大股の歩行を局限せねばならぬ。流行の前には不便も耐忍せられる、それでもあんまり不便だと言ふので裾を割つた。そこで丁度日本服のように歩く度に下脚が見える。素より西洋婦人は長い靴下を穿いて居るから地下に皮膚は見えぬ。處が面白いことには、足から風を引くと云つて冷足を鬼の如く恐るゝ西洋人が、近頃の流行とあつてカタピラ靴下を用ひ出した。地下に皮膚が見える。日本婦人の皮膚に比して西洋人は白いから奇麗ではあるが、奇麗だ連以前に笑つた處を、遠慮なしに出すなんてこれも一寸理屈がたぬと思はれる。

帽子程西洋婦人の苦心するものはなからう、帽子の種類ほど多岐に渉るものは天下に無いだらう。日本の甲形の帽子も多くの昔に出来た。帽子に一尺もある鳥の毛を立てる。日本の坊様風の帽子を造る。高くなつたかと思へば低くなり。低くなつたかと思へば廣いものに變る。『光陰は矢よりも早し』と云ふ日本の諺を籍りて『流行は矢よりも早し』と言ひ變へたいやうな氣がする。試みに歐洲の大都會例へば巴里、伯林、

倫敦、維也納等に足を運び呉服店を見給へ。店頭陳列は間斷なく取換られ其店頭に雲霞の如く群集せる婦人軍を見る、斯くの如くにして先づ商人が奇態のものを製し、これに最新「モード」と云ふ名を附けるのである。何の事はない、流行熱に浮かれし女軍連は最新流行とあつて喜んでこれを買ふ。かくて愈流行が世に勢ひを占めるやうになるのである。

眞に流行は矢の如し。見給へ狭い婦人袴の流行し始めたのは近い以前のことである。今は既に世界に廣がつてしまつた。始めは道の狭い袴を着けた婦人を路上で後向き返つて見る程であつたが、短い月日を経たる今日は廣い袴を着けて居ると物珍しく立止つて見る程になつた。流行程魔力のあるものは外に又と無いかも知れぬ。

生存競走に忙しい國民は一方に又流行と云ふ忙しい變物に奉侍して行かねばならず。さても忙はしき世の中なるかな。

歐羅巴に於ける珈琲の勢力

歐羅巴の大きな國で、珈琲の故郷は、獨、埃、匈であらう。(佛國はまだ行かぬにより抜きにする。)珈琲が支配する經濟と言ふものは、中々スバラしきもので、其上に社會上の關係が、中々複雑して、面白いものである。珈琲が若し心あるものならば、歐洲の文明を説明し盡す程の大々的小説を描き出すことが出来たであらう。

珈琲記は先づ獨逸から初める。獨逸國內の大都會は言ふに及ばぬ、田舎と言はず、村落と言はず、苟くも人跡のどゞく處には、珈琲店がある。大都會に来て、先づ珈琲店を見るに、何しろ幾百幾千の席を有し、其中には、二階、三階悉く、珈琲客に供せらるゝあり。午後から夜にかけては、「コンツェルト」が始まる、大きな珈琲店では、十數人の音樂師が絶えず、奏樂して、來客を迎へる。土曜日と日曜日の午後と來たら、無數に散在せる珈琲店が充滿し、殊に名の知れた珈琲店と來ては、千客萬來で、席を

見附け得ずして、退却しなければならぬ事もある。

埃國へ行つても同じことである、試に維也納へ行つて見給へ、此處にも大袈裟な珈琲店が多くある、規模の大なるは、其數の多いことは、獨逸の大都市を凌ぐであらう。その建物なども、一寸日本では例を引くに困るけれども、なんしろ幾百千の來客を容るゝ美はしい大建物だと言へば大方想像がつく、維也納兒は、愛嬌のよい人好きのする性質を有し、其上音樂が好きと來て居る、珈琲其ものゝ味も、獨逸を凌ぐと言ふ程だから堪らない。

匈牙利へ行く、そして主都「ブタペスト」を見物すると、茲でも、珈琲の勢力が中々侮られぬことが解る、目抜き四辻は悉く珈琲店に當つべしと法律がしかれて居るのではないかと思はれる位で、何しろ目抜きの場所に、大きな店を有して居ると言ふのであるから、大勢力の程が察せられる。

轉じて英國に來る、先づ倫敦を見るに、獨、埃、匈、であれ程猛威を逞ふする珈琲

も、英國人には糺子扱ひにされる、従て英國では、珈琲も重きをなす事が出来ぬ。英國に於ける珈琲の大敵は、茶である、其上に英國人は、「カッフエ」とか、茶店とかへ行くことを好まぬ。家庭生活が重で、其上に、各階級に應じて俱樂部生活をやつて居るからである。従つて「カッフエ」茶店と言ふやうなものも、倫敦では、大袈裟なものが無いと言つてもよい程である。

右に述べた歐羅巴の諸國で、珈琲の勢力を有する處では、珈琲が大に社交のとりもちを仕て居る、獨逸でも、埃國でも、匈牙利でも、各種の人々が、「カッフエ」に行く、貧しいとか、富めるとかの階級は、珈琲の前には無い、勿論女子も其客の主要素となつて居る。芝居が果てる夜の十時、十一時は、芝居後の珈琲と稱し、進んで一時、二時は、まだ盛に客が「カッフエ」で談笑する。

英國に來ると、全く其趣が違ふ、夜の十一時若くは十二時には、斯種の店が閉ぢられる、居たくても居れない、貧いものと富んだ階級のものと一緒に成つて話をするな

ごと言ふことは、英國では出来ない。俱樂部の生活が右の機關を閉鎖してしまつて居るのである。

獨、埃、匈等では、「カッフエ」が社交の目的に使用される、諸種の會合、例へば協議會、演說會等が「カッフエ」で開かれ、珈琲を飲みつゝやるのである。其外或は若い男女の待合所となり、相談所となり、ありとあらゆる事が「カッフエ」の中で行はれる。誠に珈琲がなければ夜の明けぬ國である。斯くして珈琲は永へに萬歳を稱へて、世を渡るのであらう。

小兒を欲せざる國民

僕の獨逸に在りける頃、一友人一男を得たり。僕友のためにこれを祝し、獨逸は國民皆兵の國柄なれば君も亦多數の男兒を望まざるべからずと。友の曰く予が今得たるこの兒は長兒にして又同時に末兒たりと。僕は擲擄半分に、そんなことが豫め解るも

のかと言へり。傍に友の妻あり、予が言を皆まで聞きとらず、『世の中には無謀にして愚痴なる男あり。その妻をして多く子を産ましむ。男子にして分別あらば決して斯かることなし。このせち辛き世の中に多数の兒女を設けて堪るものですか、生活がどうして出来ますか？。我等は決して第二兒を設けず。これ確實なり』と。僕これを聴き、これも亦文明 悪産物かと、あきれ果て、開いたる口の閉ぢざること多時。⁴⁴
これは只一例のみ、然れどもこれが西洋に於ける母若しくは妻の叫びと見做すことが出来る。否な妻たり母たる人の叫びのみならず。既に娘の叫びである。僕は多数の少女に就て直接にこれを聴けり。彼等は異句同音に言ふ。

『此生活のせち辛き世の中に、小兒を澤山に造つてどうする積りです。一人位は忍びも致しませう。高々二人まで。三人は既に多きに過ぐ。四人、五人と言ふに到つては無謀にして不知も亦太だし、斯かる愚昧の男子を得んよりは、獨身の生活の夫帯に優れる幾干なること知らず、若し生活に困しまぬとしても、そんなに産みの苦

しみを繰返して堪るものですか』と。

諸君、西洋の婦人が結婚のために苦心せるさまは日本の婦人などの夢にも想像し能はざるところ。それ程までに苦心せる婦人と雖もいざ兒を産むと言ふことになるに戦慄して恐るゝなり。而して終に婦人多数の兒女の母となるよりは寧ろ獨身の優れるに如かずとなし、多年苦心せし需婚を捨つるに至る。文明の悪産物にあらずして何ぞや。避妊法の先達は蓋し佛國なるべし。當局者は終に其趣く處の恐るべきを察し、其豫防策として、千九百十四年の春新法律を公布したることは既に人の知る處である。お隣の獨逸でも出産増加率が階段狀に減じて行くので大層頭に病みつゝあり。國民皆兵の組織で、そして世界政策をこれる獨逸國にありては出産率の減少は少からぬ痛手なりと見做すことが出来る。其他の文明國を見ても亦た同じやうな現象である。避妊法の盛なる以て察することが出来る。

避妊の行はるゝは尙ほ他に理由あり。歐洲の如く社交發達し且女尊男卑の國にあり

ては、婦人が社交的生活の爲めに他の要用なるものをも捨て、顧みざる傾あり。容姿の下るを恐れて自ら授乳の義務を捨て、容色を保たんとして受妊を避く、生活の上には何等の顧慮なきものまでが子を生むことを厭ふなり。自然思想の高調せらるゝ歐洲に於て、これはまたあまりに不自然も甚だしからずや。

法律は外よりの豫防策なり。避妊は内よりの豫防策なり。外來は内發の力に及ばざること言ふまでもなし。試に見よ佛國の新法律は、膏藥である。貼用せぬよりも優しであることは申すまでも無い。併し内毒が絶えぬ以上は、膏藥だけでは、根治は出来ぬ。見給へ法律では規定に基き第三兒若くば第四兒より保護すると言ふ。ウエル、併し第一兒、第二兒が設けられぬ以上は、空文の法律となつてしまふ。如何にして第一、第二の兒女を生ましむるべきや。膏藥的法律では六ヶしい。有福の人ですら、小兒を欲しがらぬでは無いか。膏藥法律の用をなさざるは勿論のことである。

日本にも遠かれ早かれ斯かる惡習慣が國民の間にしみ込むであらう。既に大都會で

は、斯かる傾向が既に見え初めたと言ふではないか。日本のような國で生活困難のはげしくなつて來ると一層困る。東北に一年凶作があると饑飢呼ばはりをして騒がねばならぬ。日本の農業はどれだけ發展しても、倍額のものを得る譯には行かぬ。之は工業の方面に求めるより外に途はない。日本の工業は發達し得る地位にあるにも拘はらず、その模様は實に遅々たるもので、未だに工場法案すら敷かれて居ないと言ふまでもある。

國民の頭に避妊の思想が固着してしまつてはどれ程爲政者が挽回策を講じても水泡に歸してしまふ。我國有司の輩今の秋宜しく三省して佳なりと思ふ。

死 活 の 苦

『職業苦』は約言して『生活苦』とも稱し得ん。歐洲の天地で多數の人類と密接の關係を有せる恐らく此『生活苦』の右に出づるものはないかも知れぬ。

『生活苦』の母は文明である。文明が『生活苦』を生んだのだ。文明は成る程有り難いものである。電信や、電話、飛行機、汽車、汽船、曰く何、曰く何、それを生んだ母の名は『文明』と言ふ。

文明はまた一面に有り難くないものを産み出す。イヤになつてしまふ程のことが『文明』と云ふ母の腹から生れて来る。歐洲は世界文華の粹玉であつた。文明の母の宮城であつた。世界の樂園かの如く見えた。これが俄に修羅の巷と化してしまつた。昨日まで誇り顔に咲き揃ひし花は、夜半の嵐に散らされてしまはんとして居るのである。

世界に文明を誇りし人類は、今互に戟をとつて命の取り合ひを致して居るのである。同士打をやつて居るのである。彼等自らが命名したる野蠻の民よりも尙ほも野蠻なることをやつて居る。然り野蠻の親方になつてしまつた。さりとてはあまりに早い役變りではあるまいか。

空前の悲劇、歐洲戦争！ 文明の産物と言はずして、他に然るべき言ひ表し方があ

るだらうか。今は陸海の戦争のみならず。空中戦をすら行つて居る。文明戦と言はずして他に好個の名稱があるだらうか。

文明は一種の役者である。聖人ともなり又同時に惡漢ともなり得ん。文明は右に艶手を有したる毒手を有す。文明の有する操は極めて危険なものである。勿論保證などの附けらるべき性質のものではない。文明は美衣の惡麗である。若くは惡魔の佛かも知れぬ。

歐洲の天地は若き男の血流し場となつてしまつた。今は歐洲と言ふ祖の上で魚や、獸の肉が料理されつゝあるやうなものである。女と小兒は飢に泣いて居る。『生活苦』は歐洲を通じて其勢を逞ふして居る。工業主も労働者も今は共倒れの姿である。將基倒しとは蓋しこのことであらう。

『生活苦』は更に進行して『存亡苦』若くは『生死苦』に移り行くであらう。如何にして生存すべきか、生存し得れば如何にして死すべきかの苦みである。萬策盡くれ

ば只一個の活路として囚獄あり。自ら罪をなして囚獄に引かれ行かば生命は僅につながれむと。斯くの如く考ふる人すら予は自ら目撃せり。決して筆を強ゆるお伽噺の類ではない。

否なこればかりではない。男は軍に出で、『死の苦』を嘗めつゝあるのである。男のみではない、女も小兒も『死の苦』を夢みつゝあるのである。『死苦の手』が女や小兒の身に觸れつゝあるのである。蓋し『死苦の手』は幽霊よりも物凄いかも知れぬ。これが『文華の天國』と稱へられし歐洲の變化だとは、あまりに文明の戯れも『念入り』に過ぎずやと思はる。

歐洲は斯くて『歐洲苦』を生み、死活の境を彷徨しつゝあるのである。

日、英、獨の女人

●獨逸に在りし頃一少女、記者に書を送つて、『日本では女子は男子の從者にして其地

位も何もかも、男子の下に置かれてあると言ひますが實際でせうか、若し實際とするならば、妾は日本の婦人に満腔の同情を表します、可愛さうちやありませんか！』と答へを需めに來た。

●永く歐羅巴に居て多くの人々と親しく交際をする間には、右の問題が幾度となく繰返してあびせかけらるゝ。日本の男子は、何と答をすべきであらうか、僕は一度も右の問に「ヤア」とか「イエス」とか答へたことはなかつた。併し何故に此問題が斯まで度々自分共の耳に這入るであらうか、日本の婦人に關する著述にして外國の旅行者の筆になりしもの、又外國語にて日本人の記せしもの等少からざるに、……日本婦人の罪か、抑もまた問ふ人の罪か？

●祖國の恥は外國まで持つて行つて曝らす必要はない。僕は此種の質問に對する毎に、噓とならぬ限り都合のよい臨機な解釋をすることに勉める。けれ共こんな時は僕の心がいつも太平では無い。なせ、なせ？

●成る程、日本の婦人は、或意味に於て家庭の女王である。柱石である、併し或意味に於ては、また男子の従僕に近い處が無いでもない。日本婦人の罪か、教育の罪か、抑もまた男子の罪か、或はまた他に因るところあるか？

●日本婦人には自覺と云ふものが缺けて居りはしないか。近頃日本に新しい女が出来たと云ふことである。どの意味で新しいのかしらぬけれど、實際の意味に於ける新しい女は、日本の天地にぞし／＼出来ねばならぬ。否これが日本の母となり妻とならねばならぬ。

●倫敦の名物中に數へらるゝものは、彼の選舉運動の婦人軍である、婦人が果して選舉權を握らなければならぬかと言ふことは問題であるが。併し婦人にも選舉權を與へよ、婦人にも選舉權を與へよと呼ぶ聲を有する婦人の自覺と意氣込とは見上げたものではあるまいか。日本の婦人に、此自覺が生ずるにはまだ時を要するであらう。

●獨逸の婦人は、日本の婦人の如く、家婦としてよく働く。實用的である。英國婦人

日本婦人の自覺を論ずるべきである

は、家政の點に於て、獨逸の婦人に甲を脱がねばならぬとは、衆目の見る處らしい。

●社會組織の異なる國の婦人を比較して、其現象の長短を論ずるのは、無理のところもないではない。併し如何に社會の組織が異つて居ても、共通して婦人が具へて居らなければならぬものが一つならずある。これは文明の國民は申すまでもなく、文明でない國民でも、文明を希へる國民としての婦人は共有せねばならぬ。婦人の自覺は、蓋し其一つであらう。

●自覺の缺けて居る國民は、素より發展せぬ、日本婦人に自覺が全く缺けて居るとは居へぬ。併し自覺が休息の状態に在る。これが發芽して枝葉を出し花を開き、實を結ぶに至らなければならぬ。これは日本の婦人に對して注文すべき今日の最大要件でないかと思ふ。

●日本婦人が愚であるとは誰人も言はない。併し日本の婦人が普通の智識即ち常識に富み、これを日々の生活に應用して、人間生活の向上と發展とにつとめなければなら

ぬと言ふことは、何人にも異論はあるまい。

●例へば獨逸の婦人が、よく家政を整へ、時間を上手にふり分けて、事務と交際との區別を立て、社交も圓滿に、家のことも手落なく、其の外に讀書もする、遊びもして、實用的に且有益に暮すと云ふことは、日本の婦人も努めて貰ひ度い。

●數日前のことである、僕は外國雜誌を受取つて、一外國人の日本に關せる記述を讀んだ。日本人の缺典許りで、二十數頁の長文が滿されて居る、其中に日本人の時間を應用することが、頗る下手であると言ふことが擧げてある。

●訪問時間も、變な時に許してある。少しの事に多くの時間をつぶす、集合も時間通りに行はれぬ。「日本の婦人は、一週間家に居て働き續けて、尙ほ日曜に休養の時間が造り得られないのですか」と。實際日本の婦人が時間を下手に用ひつゝあることは事實である。

●日本の婦人が、日常生活上に、進歩せる今日の科學を應用し、生活を便にし、且修

學、修身の暇を造り、自覺の精神を養ふと言ふことは。今日も、また將來も必要のことである。

●元來歐羅巴の婦人の缺典も擧げ來れば、一二にして止まぬ。けれ共他山の石以て我玉を磨くには、他の缺典を輸入、紹介するの要なし。日本の婦人が以上述べ來りたる所に注意し、世界の舞臺に立つても、後へ引かぬ、堂々たるものとなる覺悟が必要ではあるまいか。

日本人の愚的半面

上

●最近發行の獨逸雜誌『東洋の精神』の誌上に亞細亞人種殊に日本人に就きて、民族的、心理學的觀察の結果が記述されたのを見た。ハーテン・カーテといふ醫學と哲學とのドクトル肩書を持つて居る人で、日本人に關しては、種々觀察の結果を公にした

ことがあると見える。此論文は、實に二十數頁に渉る長文であるが、今其概略を摘んで日本の讀者に紹介しやうと思ふ。

●日本人の中には、「ブツイドスツポール」(Pseudostupor)を云ふものが多くある。(これは日本語に譯すると假性愚鈍と言つたやうなものである)即ち注意力が減退して、思想の聯鎖が緩漫し且貧弱の状態を言ふのである。日本では、汽車の中、又は電車の中で乗客の四分の一又は三分の一は、假性睡眠又は高度の睡眠状態を演じて居る。凡て日本人は、夜中十分に眠らないのかと思はれる。歐米では、この状態を一度も見たいことはない。日本人が日々の生活上、よく物忘れすると言ふことは、矢張り右の「ブツイドスツポール」に關聯して居るに違ひない。

●日本人は注文、約束等をして置きながら、それを守らぬことが甚だ多い。物忘れの多いことは、警察統計を見てもよくわかる、千九百十二年の警察統計によると忘れ物の數が、七萬四千箇以上に達して居るに、届けて出たものが僅かに一萬八千五百四十

四件にしか過ぎぬ。これは大阪に於ける事實である。日本に火事の多いのは、一つは「ブツイドスツポール」に因るのであらう。日本の市街を歩いて見ると、眞直に歩く代り、之の字形に横曲りして歩いて、半分睡眠の狀で居る者が澤山に見られる。

●時間の觀念が、日本人には缺けて居て、晝食に招かれて、一時間も早く来る人が居る。訪問時間が、キチンとして居らず。日本人の訪問は、時間が澤山かゝる。つまりぬ事に時間を費すのである。

●人に物事を命じられて、其事柄がよく解からぬのに、機械的に、「ハイ」と返事して、忽ち何をしてよいか解からずに困る傭人、召使等が多くある。出入に際し、日本人が戸障子を閉ぢることを忘れることは、珍らしいことでない。

●汽車及び電車に因る災害は、日本では随分多い、例へば大阪の事實を見てもわかる、千九百十二年度の電車に因る死人若しくは負傷者は八百二十一人で一日平均二・二人である、其の中小兒は僅かに七十三人、右の内四百八十一人は、軌道を横ぎらんとし

て、電車に觸れ、死亡し又は負傷したものである、神戸のスクタ(生田?)の踏切で、事柄の起ることの少くないのは、「ポイントマン」の不注意に因るのである。

●日本人は犬を懼るゝこと甚だし。其くせ犬が澤山居る―而も醜い犬が―馬もまた日本人が親しまぬ。日本では散歩用に馬に乗ることは、稀である。日本の軍人の乗馬の下手なのは、世人の知る處である。日本人は、馬に對する愛情と云ふものを感じないのである。

●動物に對する情は、日本人には十分發達して居ない、たゞ猫と狎が重寶がられて居る位である。日本の動物園例へば東京、大阪、箕面等を見ると、實に慘澹たるものである。珍らしい獸が、動物園に到着しても、其後暫くにして、死んでしまふは、其取扱の悪いためである、日本にもハーゲンベックが生れねばならぬ、(譯者曰くハーゲンベックは、獨逸ハンビルヒの大動物園の持主で先程死亡した人である)。

●日本人は、動物を虐待する人種である、猫の子や犬の子を野原に持つて行つて棄て

る、佛法は動物虐待を戒むると聞けど、日本には、其反對の現象がある、日本人の精神は、多く佛教の感化を受けて居るとは言へない、臺灣や、朝鮮へ行つて見るとこれがよく解かる慈悲の心と言ふものは見つけることが出来ぬ。

●小兒に對する親の愛情と言ふものも白人種にくらべると、薄いやうに見える。殊に女の兒に對しては餘程ひどい、下層社會では、女兒は物品と同じやうに思つて居る。それでなければ、日本で醜業婦がこれ程に發達して居る理由がわからぬ。

下

●羞恥の感情も日本人には、發達して居らぬ、男女の間柄、若しくは身體のことに就ても随分思ひ切つたことをする。一例を擧げて見ると、日本の一少女、年は十八歳位で小間物を販賣して居つたが、或る男に一種の品物を賣付けた。此品は、男子が生殖器病豫防に用ゆる道具であつたが、其少女は臆面もなく、其品物の名を呼び、男の尋ねに従つて尙委しいことを話したと言ふ。日本の新聞や雑誌を見給へ、生殖器病に關

するもの、廣告が出て居る。

●人體美に關する感情も、日本人は、西洋人に比すると大差がある。明な目、黄金色の毛髪、紅頬、高き鼻等、これは通常日本人からきらはれて居る。日本人でも西洋に居て、西洋の事物に馴れた人は、次第に美的觀念が、西洋人のそれに近づくやうになつて來る。それに反して日本に長く居た白人種はどうしても日本の美的觀念を解することが出來ぬ、日本人は裸體美に關して、原始的な考へからして、興味を持たぬ、ストラッツの如きも、日本人は人體の裸體美を解釋することが出來ぬと言つて居る。

●履物の(草履、草鞋、下駄等)穿き換へ、これは只に住屋の出入に要するのみならず、住室から厨へ、厨から住室へ、便所、湯殿、庭園、さては、茶屋、芝居、活動、船上、……而かも小さい汚い小船でさへも……履物の脱ぎ、穿き、これは能く肉づきのした西洋人、殊に婦人には、とても出來ないことである。

●日本の家の設備は、非常に簡單なものであるらしい。夕に戸を閉ぢ、朝に開けると

言ふことは、大きな家では、面倒臭い仕事である。日本には、家の閉鎖を便利にすること、冬日の寒さを防ぐこと等につきて考へた人が無いと見へる。日本室の煖法は木炭を盛れる火鉢である。

●日本人は、或人に對しては、宗教的であるが、或人に對してはさうでない。此六かしい問題に對しては定まつた斷案は下せぬにしても、自分の考へでは、日本人は一體に宗教的でないと思ふ。宗教が人間を美的に向上させ、日々の生活をして、道德ならしめるものとするならば、日本人は自分の考へでは少くとも宗教的で無い。

●先程東京で、文部大臣が、佛教、神道、基督教の融合を企て會合を催した、惡弊を改むるが爲に……併し効能は無かつた。また有り得べきことでない、新らしき宗教、これが若し日本に將來出來るとすれば、それは道德的のもので、同時に社會黨に對する武器で無ければならぬ。政府は社會黨を無闇に恐れ、そして無謀な抵抗をして居るのである。

●日本人は一般に、且若い人も、愛國心は古くから日本國民の頭腦に印象されて居ると信じて居るけれども、それは誤謬である。昔はそんな愛國の精神は無かつた。武士の愛國心は、大名の支配下にのみ限られて、領土が武士の祖國であつたのである。西洋との交通が盛になつて茲に始めて愛國心と言ふものが發達したのである。國旗（日の丸）の如き、國歌（君が代）の如き、また此時代に設けられたのである。

●武士道！これは、歐米では相違した解釋をされて居る、武士道の意義並に其原始に就ては、幾多議論のある所である。日本の記者が二三年前、太陽誌上に武士道のことを書いて、武士道は英國人の發見に係るものかも知れぬと述べて居る。日本が戦争に勝ちしは、武士道の爲めにあらずして、西洋戦術を日本軍が應用した爲めであらう。●萬物は變換す、自然と共にかはり行く、これは己に吾等が古くより知るところである。而し人間の業又は人間の精神に關するものは、無限の長時間を費して變じ行くものである。

●自分は、舊日本が死滅したとは信じない、……多くの學者殊に英國人が稱へる様に……舊日本の死滅は恐らく假死の状態である、若しくは舊日本は致死傷の状態にあると思ふ。

●見給へ、日本でも、或はその外の亞細亞に於ける文明國又は半文明國でも、これは丁度多數の枝を有せる復活性樹木に比較することが出来る、時代の變化につれて、枝葉は幾度か死滅する。けれどもまた新しい枝が出来る。併し此枝は、何れも古い幹から生じるのである、其幹の根は、深く深く地下に蟠つて居るのである。幹から始めて分れたものは、枝に於ても、花に於ても、その性質は變じないのである。

倫敦に於ける飢餓軍

●英國の諺に曰く。「英國の太陽は、光無し、されど黄金は始終光り輝けり」成る程英國の太陽は日本の太陽に比べると光が薄い。まるで他種の太陽かと思はる。冬にでも

なると、太陽が何處に在るのか一向分らぬ程に暗い。併し黄金の光はエライ威光を有して居る。果してこの黄金の光は太陽の光のやうに浴ねく國民を照し得るであらうか。

●一寸先づ倫敦を見給へ。倫敦には七百萬近くの間人が居る、此中に約一萬人程富豪が居る。此富豪が所謂黄金の光を輝かして居るのである。顧みて細民若しくは貧民と云ふもの、數を見ると大した多勢のもので、これが倫敦の町で可憐な進行軍を演じて居るのである。素より右の二極階級の間位する中等社會の人數も多くあることは申すまでも無い。

●英國程貧民と富豪との差別の距離の甚だしい國は又と他に無いだらう。國家の上から見てもこれは一つの缺典である。此社會現象は今日如何ともすることが出来ない。英國の民が慈善心に深いことも明かである。自分は先達て某傳道館を訪問した。大きな宗教傳道館である、何しろ世界中で此傳道館の負擔の下で働いて居る人が一萬幾人。幾萬百圓と云ふ巨額の年々の支出は、只英國民の慈善心による寄附に基くと云ふこと

である。同館には多數の貴金屬性裝飾物が陳列してある。例へば金時計、金鎖、腕輪等の如きものである。其理由を聞くと傳道の費用として出すべき金は無いけれども、せめて自分の所持品だけでも寄附をするにより、費用の幾分に充て、貰ひ度いと云ふので、多數の人が寄附したのだと云ふことが解つた。此點に見ても英國人の慈善心に富んでゐる一斑が解せられた。英國には随つて慈善事業が非常に進歩して居る。議會でも此間慈善事業に關して報告があつた。極めて良好の状態で發達しつゝあると云ふことである。

●併し一度眼を轉じて貧民の狀況を見ると、實に慘澹たる光景である。譬へば東倫敦に行つて貧民部落を見ると、實に可憐なものである。東倫敦のみ許りではない。倫敦市中に居ても貧民の群の多いことが解る。前言つた如く倫敦の天氣は變り勝ちで雨もよくふる。空氣は勿論悪い。煤煙の都である。道も悪い。貧民の住んで居る處へ行つて見ると、狭い函のやうな家の中に住んで居る人間は、破れた汚穢な衣服に漸く體を

包んで、青物屋の店の臭ひが鼻を突く先きに立つて、一錢や二錢の買物をして居るあはれな様子がわかる。雨の日の貧民街のあはれさは一方で無い。

●人若し倫敦市中に於て、瞬時足を止むれば何處にても此種の貧民の群を見るべし。顔色悪しく元氣衰へ、一種形容し難き姿である。氣の毒と云ふも尙愚であると言ふ程である。これは實に生存競争と云ふ恐ろしい戦場での落武者である。一度落武者になれば轉じて強いものになることは甚だ六ヶしい。強いものは弱いものを押しつけてドシ／＼進んで行くからである。生存競争の劇しい處では他人のことを顧みる暇がない。自分自己の生活が重要な問題であるからである。

●輝ける玉を掌上に載せて誇れる富者の足下に、幾百萬の飢餓に叫べる窮民あり。如何に變化多き倫敦とは言へ、一度此暗黒面を窺へば戦慄せずには居られない。倫敦は生存競争の一大戦場で、これは何時までも持續して行く、そして落武者が毎日々々此戦場から流れ行くのである。負傷者が此戦場から押し退けられるのである。生存の競

争程恐ろしいものはない。

●英國には貧民保護の爲に巨額の税金を徴取せらるゝあり、公立の貧民保護局の外に、私立の慈善團體が非常に多くあるけれども中々以て足らない。落武者の數が益々増して行く。

●日本でも社會状態が變じて貧民の數が増加し悲惨な光景を描く日が来るかも知れぬ。否な早くも既に來つゝある。爲政者は社會政策と云ふものゝ上に十分注意して國民全般の安寧と幸福を謀るやう注意することが肝要であらう。

修養なき國民

獨逸に居た時のことである。或有力な雜誌社から、一書を受取つた。何かと思つて開いて見ると、斯様なことが書いてある。

「一體日本では普通に我が獨逸を如何に解釋して居りますか、新聞などで見ると、

る文明を見、且國民の大精神を學び得て、祖國の將來を思ふこと切に、時に眠りなり難きものあるは、何がためであらう。日本に居ては日本の缺典が十分に眼に映らぬ。映つても、模糊として居て、痛切に感じない。一度國を去つて、異郷に在れば、日本人の具へて居る缺典が、身にしむやうに分る。日本は戰勝の國と言ふ。第一等國の列に在りと言ふ。實際爾うであらう。併し世界の檜舞臺に立つて、平和の戰爭をするには、中々骨が折れる、日本が今日此戰場で、勳功赫々たるものありや否や、これは問題である。

英國人の教育の基礎は「ゼントルマン」たれと言ふのである、「ゼントルマン」として恥なければならぬやうなものは、英國人として恥づべきものである。これは實に人となれ、人となれ、と言ふ聲である。英國の世界に大を致せしものは恐らく此の「ゼントルマン」のためであらう。英國より「ゼントルマン」を去れば、英國は抜け殻になるかも知れぬ。

この「ゼントルマン」は、一朝にして出來たのでは無い、幾百千年の熟練鍛錬を要したものである。文明は一面人間をして、生存競争の爲に、精神の修養に暇なからしむるものである。餘程堅い土臺がなければ、生存競争が、人間の價値を代なしにしてしまふ。日本人が、歐洲の文明を見て、祖國のために、將來を思ふもの切なるは此點である。

英國、獨逸は、歐羅巴の活舞臺である。文明と言ふものが、人間を生存競争の戰場に輸送して居るのである。此時に當り、人心の腐敗一國に互ればこれは即ち國の滅亡する秋である。日本に於ける生活の程度は、進歩の途中にあるにしても、今日の生活難と言ふものを獨や英のそれに比することは、勿論出來ぬ。これは一面まだしも幸である。併し自然は、この状態を進ませねば止まぬ。日本人が世界の文明を容れると共に、また生存の競争益烈しくなると共に、國民の大精神と言ふものを養つて置かなければ大變なことになる。國民の精神一度墮落せば、其國は消滅してしまふ。樹木生氣

を失へば、即ち枯木である。枯木は亡國の状態に在るのだ。

一の例を擧げて見てもよくわかる、日本の爲政者に高德の人乏しく、位と財寶を去れば、辻車曳ける人夫にも尙三舍を避く程の人ありと稱せらる、國の爲に悲しむべきことでは無いか、こんな状態が永續しては、國家の行末が案じられて仕方が無い。

歐米の社交と舞踏

歐羅巴の社交會で、殊に年若き人々の間に舞踏程勢力のあるものは無い。何しろ青春の血に燃ゆる若き男女が相擁して狂ひ廻るのだから樂みの少からぬことも察せられる。歐洲に居た日本人は必度經驗をしたであらうが、先づ宴會とか集會とかに出席して多數の婦人に接する機會を得たとする。先づ第一に尋ねられるのは日本にも舞踏がありますかと云ふことである、そして日本人は所謂歐洲風の舞踏を知らぬといふと『まあ何と云ふ樂みの少い國でせう』と。彼等はその美しい口許に嘲りの笑を浮べる。

幼少の時から音樂に馴れた國民が、麗はしい奏樂に合して男女相擁して躍ると云ふことは成程楽しいに違ひ無い。わけても秋から春に懸ては舞踏の全盛を極める時で、其中でも一月二月は極點である。歐羅巴の各國では此一月二月に假裝舞踏會が行はれる。大都會では實に盛なものである。無數に組織されて居る諸種の團體が舞踏を催す舞踏學校の催しに係るもの其他寄席、料理店、「ホテル」等の催しに係るもの。數へ來れば限りが無い兎にも角にも數百數千の男女が、一堂に會して躍り騒ぐと云ふのだから、大したものである。田舎の「ピヤホール」などにも「ピアノ」の備へ附けてない處はない。日曜日などには都市から田舎へ出懸る連中が其處で麥酒を飲んだり、舞踏の組を作つて躍つたりして居ると云ふ有様である。舞踏の盛な結果、舞踏教師は到る處にある。先づ小學校を卒業して宗教的儀式を濟ませ男子は短い「ズボン」から長いのに移る。女子は膝までの袴が長いのに代つて、大人の仲間入りをすると、初めて舞踏を習ふことが出来る。舞踏は下流と上流とを問はず、社交の一機關である、そして日

本の舞は足よりも手と袖で跳るのだが、これに反し西洋の躍りは足である。足が極めて敏捷に働くのである。日本の舞のやうに優長なものではなく其動作は餘程忙しい。それに最近例の「タンゴ」と云ふ舞踏が歐羅巴の天地を横断した。亞米利加へも無論足を延ばして居る。日本へも輸入されたといふことだが、此踊りは近く一年程前から八ヶ間敷く評判に上り出したので、何しろ相手をシカと抱しめたり、女がトンボ返りをしたり、横になつたり、様々のことをやるので普通の舞踏會には用ひられないが、何しろ奇を好む歐洲人のことであるから、「タンゴ」熱は非常なもので埃、匈、獨、佛、英等の芝居等にも「タンゴ」が必ず目録の一に這入つて居る。

佛國に於ける人口増加法の窮策

佛蘭西は人も知る如く年々人口が減じて行く。國家の上から見るとこれ程心細いことはない。此悲惨な現象を挽回すべきためにとて諸多の學説が出た。一應理に於ては

感心すべきものがあつても、イザ實地に應用すると言ふことになるると非常に困難なため法律として制定せらるゝには至らなかつた。

處が此現象は何時まで立つても悲惨な方面に進行するばかりである。脊に腹は代へられぬと云ふので愈千九百十四年四月一日新しき法律が發布された。

お隣りの獨逸なども年々人口増加の率が減じ行くので近頃俄に頭痛に病んで居る折柄此法律は大に世人の注目を惹いた。獨逸では此法律の結果を待つて居る。若し好果と云ふことであれば獨逸でも其方法を應用するかも知れぬ。

法律の内容は左の二つから成つて居る。

一、妊婦及び産婦の保護

二、多兒を有する家庭保護

右の新法律に因ると先づ懷妊せし婦人は解職せず仕事の中絶することが出来る。工業に従へる婦人、雇人としての婦人等も此の法律を適用することが出来るのである。

そして分娩後四週間の後には現職に就くことが出来る。従來の法律は分娩前四週間休業し得るのであつたが新法律はこれを大段的に擴張して、苟も懐妊と解つた日から職を休むことが出来る。これには醫者の診断證明書は要せない。若し婦人にして分娩前に休業せなければ分娩後四週間は公けに休業することが出来る。これを拒む資本家は法律によつて罰せらるゝのである。

新法律は右の制定を實行し易からん爲分娩の前後休業せる婦人に一日〇、五乃至一、五「フラン」の割で給與せらるゝ。母が子を自分で養育する場合は其一日の救助額は更に高い。此法律は職工、商店員、召使等のみならず、他人より給料を受けて生活せる全般の婦人に適用せられるので、自分の家で賃仕事をして居るものもその中に含まれるのである。小兒が死亡したる場合若しくは死産の場合は四週間分救助金を支拂はれる。此法律の範圍は其他にまだある。自分の職業のみで生活せる婦人も救助金を受けることが出来るし。夫あるものでも夫の収入十分ならざる場合には一定の法式を踏ん

で此法律を適用し得るやうになつて居るのである。第二項の法律は救護を要する家族の小兒の教育を救助する目的である。第一に救助せらるゝは父母を有せる第四番目の小兒より始まる。若し母なき場合には第三番目の小兒より、父なき場合には第二番目の小兒より保護せらるゝのである。右の法律に要する條件として小兒の年齢十三歳以下なる事を要する。

救助金は一箇月毎に前金として仕拂はるゝ若し濫用の恐れある時は保證人に渡す。右の法律は窮策には相違ない、果して好果を見るや否やは時日を待たねばならぬ。

社會政策程、達識を要するものはない。右の法律も無いよりは優しに違ひないが姑息たるは申すまでもない。三人目の小兒から若くは四人目の小兒から保護すると言つたつて、一番目、二番目の小兒を生ませると云ふことが出来なければ駄目だ。國民の上下を通じて避妊の方法が普く行はれて居ては一寸嫌に釘の感ありではなからうか、佛蘭西計りで無い、獨逸を見ても、或はその他の文明國を見ても、文明と出産の減少

右の如く新聞雑誌の刊行進歩せるが故に、其種類も従つて區々に分れて居る、政黨に屬するもの、然らざるもの、婦人新聞、青年、小兒、家庭等の爲に特別發行せらるるもの、其中わけて多數を占むるは、宗教に關するものである、英國は宗教本位の國とも名けらるゝ程あつて、宗教の勢力は大したものである、文學に關する雑誌は、多數に英國で發行される。若しこれを科學の方面、例へば法律、哲學、萬有學、技術、工業等に涉つて觀れば、これに關する専門雑誌は、獨逸に比較すると、餘程少い。此方面は、獨逸の得意とするところである。英國人は、外字新聞をそんなに好んで讀まない、英國新聞の中に外國の記事が掲載されるを以て、それで外國の事を知るには十分であると見做して居るからであらう。國民全般の讀書力の程度を見るには、代表的新聞雑誌の内容を觀察するのが近道である、讀者の進歩せる處では、幼稚な、杜撰な讀物は大した發達は出來ない、勢力を得るなどのことは勿論望まれない。

結 婚 苦

歐洲にて、年若き女子を苦しめつゝあるものは蓋し結婚難であらう。結婚苦の主因は生活苦の爲めである。生活苦の結果男子にして結婚を希はざるものあり。希はざるにあらず、止むを得ぬ次第なり。歐洲の婦人は結婚するまではよく働けど結婚の後には、夫に要求する處多く、夫の方で何か言へば苦しむ爲めの結婚にあらず樂む爲めであると細君にしかるゝなり。妻は夫にアレやコレと要求することを當然の如く思ふて居るなり。男の中には細君の御用商店より莫大の勘定書を手にして、男子須らく獨身たるべしの歎をなすもの少からずと言ふ。歐洲に男子の結婚避忌者の多き理由釋然たるわけではあるまいか。

それに歐洲の各國譬へば獨逸の如き、英國の國き、露國の如き、埃多利の如き、匈牙利の如き、デンマルクの如き、フインランドの如き、諾威の如き何れも男少女多の

國ならざるは莫し。加ふるに結婚避忌者の數の決して少からざるに於ておやだ。

歐洲の人は日本の如く媒妁制度を知らず。斯かる故に歐洲の人は此制度を不自然と見做して一笑に附してしまふなり。愛情に基く結婚と言へば成る程其響きは美はし。然れども『黄金結婚』なるもの、數が歐洲に於て如何に多きかを見れば、こゝにもまた理想と相距る遠きを發見することが出来る。

『黄金結婚』の發達は『生活苦』がその母であらう。西洋にては婚約に先ち、男子は我が戀人の親に對して持參金の額を明らかに問ふことを耻とせず。若し兩者の間に折合附かざれば結婚は成立せず。結婚は牛馬の賣買にも似て、一個の商賣とも見れば見られ得る。金主妻副のことあり。妻主金副のこともあり。何は兎もあれ其發達せること豈驚くべからずや。

結婚の樂みを得んとて憂身をやつせる西洋の婦人は相場師の如く籤引きにも似たり。まぐれ當りて飛んだ福を得るものあれども、斯かる幸運の女子は至つて少なく、

三年も五年も男子に弄ばれ、あげくの果に約束せし結婚をお流しにして顧みられざるもの、數は、蓋し十中の八九を占めむ。西洋に於ては男子が婚約を履行せざる爲め女子が法廷に訴ふるもの引きもきらず。これ人の知るところなり。男子は初めより結婚を望みたるにあらず、斯く云へば女を弄ぶに都合よければなり。斯くても歲月は人を俟たず、遂に結婚期を見逃して仕舞ふもの比々皆然り。此故に西洋にては少數の上流者を除く外は何れも自活の途を講ずるなり。小學校を終ると同時に職業を求めにかゝるなり。結婚は駄奴のものと思做しての業なり。

西洋ではお自慢の自由結婚行はるゝが故に男女の交際も亦た自由なり。交際の機關は到る處にあり。舞踏、芝居、寄居、珈琲店、麥酒鋪、遠足、遊戯、運動悉く男女交際の機關ならざるはなし。此故に西洋の男女は相互に手を握り、接吻を交換する程に心安き間柄にありても結婚の前に至りて其墻壁の高きに驚くなり。即ち西洋の男女は相互に接近して樂めど、絶對的のものに非ず。女の方で、さらば結婚をと言へば其交

際は杜絶して仕舞ふなり。「結婚苦」を叫べる姫御前が、人生再び女子に生るゝ勿れの歎を發するに至るのである。一掬の同情に價せずや。

歐洲に於ては「結婚苦」に泣くもの目を追つて多からんとす、獨を見よ、佛を見よ、英を見よ、何れも然らざるはなし。今や端なくも歐洲は硝煙彈雨の天地と化した。年若き結婚候補者の多數は日々戦場の露と消えつゝあり。國に在つては職を求むるに苦み、嫁がんとして相手なし、嗚呼歐洲婦人界の恐慌豈察すべきでは無いか。統計は此悲惨なる事實を具さに物語るであらう。

英國と獨逸の日曜

獨逸から、英國に来て、倫敦で第一に目につく、大きな相違の一つは、日曜であらう。獨逸の日曜は騒がしい、之に反して倫敦の如く、交通の頻繁な都でも、日曜日の朝は實に静閑なもので、全市死すとも形容することが出来る。商店、工業所、會社、

銀行は申すまでもなく、郵便も電信も、倫敦では日曜をするのである。郵便配達は全日只の一回も行はれず。郵便物の集取は土曜日の夜の十二時から、日曜の夜の十二時まで停止して居るのである。賣買は悉く停止する。

織るが如く頻繁に通ふ乗合自動車も、日曜の朝は、晚く運轉を初め、其回数も、平常よりは少く、鐵道列車の數も、大に減少される。貨物列車は、運轉停止、この爲めに日曜日と他の週日との時間表が別々に出來て居るのである。料理屋の如きも、教會禮拜の時間は、閉鎖され、午後僅に、一定の時間、開かれる位のことである。其上に尙著るしく目だつことは、芝居、寄席其他の娛樂機關は悉く閉鎖されてしまふことである。それに反し多數の博物館は日曜日にも開かれる……殊に夜に涉りてまでも……これは、旅行者の爲には、唯一の慰めである。新聞も日曜に出ないのが多い。商店にして、開かるゝものは、僅かに煙草屋位のことである。

斯くの如くにして倫敦の日曜は、使人も被雇人も、安靜をとることが出来るので

ある。

日曜日の朝は、特別に長く眠るのが、習慣になつて居て、教會の禮拜時に初めて市行く人を多く見ると云ふ有様である。獨逸に比すると、宗教の盛んなことは著るしい、倫敦には、大小の教會無數にあり、日曜は、全日殆ど間斷なく、各種の集會に使用される。従つて日曜學校の如きも、盛んなもので、數百の兒童が教師に導かれて教會に趣くのである。日曜以外の週日に於ても、教會に於ける集會は、頻繁に催される、要するに此宗教生活と云ふものが、英國にとつては、大きな意義のある處と思はれる。日曜の午後は、公園に散歩をすると云ふ位のことゝが主なもので、多くは家庭で、親子、近親のもの等、音楽を樂み、談笑を事とするのである。

これに反して。

●●●●●
獨逸の日曜は、外出の日曜である、娛樂の場所、芝居、寄席、音樂場、舞踏會等は申すまでもなく、珈琲店、麥酒舗は、千客萬來、愉快のありだけを盡す主義で、英國

の如く、料理店に時間の制限なければ夜を通して、朝に至るまで居續けることが出来る。従つて夜の景も盛んなもので、夜の芝居が果てると、珈琲店若しくは、麥酒舗につめかける、つめかける夜の十二時、一時は、中々盛んなものである。

其他勿論郊外にも出る、要するに獨逸の日曜は、家庭外の日曜である、勿論交通の機關が制限されるが如きことは無く、何んでも愉快に暮すと言ふのが主眼で、日曜には財布を叩いて、娛樂を恣にするのが習慣で、日曜日に家に閉ぢ籠るなどは、陰氣の陰氣なもので、病人同様に見做さる位である。

此點が英國人と獨逸人との異つた處である。英國人は、獨逸人に比べては、家庭と云ふ觀念が深い、換言すると、家庭生活により重きを置いて居るやうに見られる。●●●●●
英人も、●●●●●
獨人も、●●●●●
同じ宗教を有して居る國民であるが、●●●●●
状態は、●●●●●
大に相違して居る、●●●●●
獨逸では、科學の勢力が宗教を壓する傾があるやうに見へる、信仰深き國民とは、一寸思はれ難い。教會を脱するもの、若しくは、自由思想の發展と言ふ様なことが、近來

益盛になつて来た。自由を叶ふ結果、風俗と習慣と云ふものが動もすると飢を逸して、悪風、悪習に化してしまふ。これ等は獨逸の缺典として擧げらるべきものであらう。若しそれ科學の研究に熱心にして、其精力に富み、新進の科學を人間生活の實際に應用せんと力むるの元氣は、獨逸人の誇るに足るべきところだと思ふ。

競馬を観るの記

倫敦名物の中でも競馬程多くの人を寄せ附けるものは他になからう。何しろ二十萬三十萬の群集をよび寄せると云ふのだから、其盛なことが想像される。

毎年春季に開かる、競馬會は通例五月の末と定まつて居る。場所はエブソムとて、倫敦より汽車で約三十分程。今年も二十六日より二十九日に渉る四日間エブソムの原野は例により雲霞の如き人の山にて滿された。

倫敦から連發される臨時列車は殆んど間斷なく群集を積んでエブソムの原野にさら

け出す。来るはく長いく列車に積み込みへし込めてドツとエブソムに流れ込む。我等が見て一寸奇體なのは臨時急行列車が例日より賃金が高いと云ふことである。午前十時若しくは十一時後の列車を利用するものは甚しく高い賃金を拂つて競馬場へ赴くのである。

臨時列車が間斷なく連發されるけれども、これを利用せずして馬車、自轉車、自動車を驅つて洒流込む連中も中々大したものである。何しろ幾千臺の自動車處せましと競馬場の周圍を取巻いて居るを見てもわかる。

競馬は倫敦の國民祭とも稱せらるべきもので上は皇帝より下は傭人に到るまで興味を有し、其勝敗を論ずると云ふのだから其騒ぎ方と云つたら凡そ想像が出来る。日本でこんなにも多人數を集めるものは一寸其例を引くに困る。逆も大相撲どころの騒ぎではない。

僕は二十七日の朝倫敦から群集の中に交り込んで友人なる獨逸人とエブソムに流れ

込んだ。エブソムは廣漠な原野で見通しもつかぬ程の廣野である。此原野を横切つて進むと數百數千の荷車と荷馬が並んで居る。これは此無數の群集を當て込んで大儲けを仕様と云ふ飲食店、雜貨店等の荷車なんだ。

「グラウンド」の周圍には常設の觀覽場がある。三角形の一邊を「グラウンド」に向けた様な建物で、此斜めの席には群集が高い席料を拂つて押込みへし込む程に充満して居る。

當日は、皇帝の愛馬が競伎に列すると云ふので、皇帝夫妻も當所へ參られた。午後一時三十分が當日の第一回目の競馬である。一時頃には既に「グラウンド」の周圍は身動きが出来ぬ程に群集が寄せ込んだ。

何しろ倫敦から來た幾百の二階附乗合自動車の屋根には男と言はず女と言はず起立して居る。其他自動車で洒流込んで居る無數の觀客は其自動車を適當の場所に留めて、お姫様も御夫人も自動車の屋根に昇つて立ン坊の姿で一生涯懸命に其勝敗を見ると云ふ

有様で其混雜も一方ではない。

英國は遊戯と運動の盛な國である。それにしてもよくもそれ程多數の人が集まつたものだと思はれる。これには一の有力な理由がある。理由とは競馬に伴へる賭事である。英國人程勝負事に興味を持つ國民は外に無いだらう。見給へ遊戯の中でも勝敗に關せぬものは英國では一向發達せぬ。

競馬に賭けをやることは上下の各階級を通じて行はれて居る。賭け事のうちでも競馬程普く行はれるものは他に無いであらう。何しろ上層の社會は勿論下男下女と云ふ處まで及んで、家庭では親と子供の間に行はれると云ふのであるから其範圍の廣い事がわかる。

「グラウンド」の内部には無數の賭場所がある。此處で次の競馬の目録が掲げられ無數の人々がこれに賭けをやるのである。一人が高く揭示された競馬目録の前で賭けの口上を言ふ。其間に有志者が賭金を拂ふ。傍に帳簿方が居て其拂込を記入して居る。

何しろ男と言はず女と言はず賭事に一生懸命になる状は一寸日本などでは見られない。此等の賭場にて行はるゝ賭金は勿論多額では無いけれども、賭の申込者が多数なる爲め當つたものは少なからず甘味をしめることが出来る。其代り巾着を空にして馬鹿を見たとつぶやきつゝ歸る人も少くはない。

英國民程「自由」を愛するものは又と他にあるまい。自由の行はれぬ所では、自由が得らるゝまで國民が反抗する。賭博の業もつまりは自由を毀けぬと云ふ意義の下に許してあるのだらうが、あまり我等の學ぶべきことではあるまい。

僕の傍に田舎から來た中老の婦人が居た。服装、品格、居動、言語等を総合して見ると農家の女であることがわかる。荒くれた手に短かき鉛筆を握り競馬の「プログラム」に○を附けたり、×を附けたり其熱心の態度が普通でない。それも道理。此農婦は一行の農婦連と一競馬毎に賭をやつて競馬の勝敗が定まるや否や連の婦人輩と賭の勘定を済ますと云ふ早業で、一競馬毎に此農婦の巾着は重くなり又は軽くなるので

ある。

若し此競馬に「マイナス」賭事として計算すれば「イクオール」は餘程勢力のないものになつて現れるだらう。

當日競伎に加はつた皇帝の愛馬は第一着を占める事は出来なかつた。道がは英國だ。皇帝の馬が競馬に出さるゝ。皇帝が競馬の見物に出掛けらるる。

遊戯と運動に熱中する英國の民は乗馬も非常に好きである。馬は英國民の上下を通じて最も愛せらるゝ動物の一つである。英國婦人が乗馬に熱中する事は試に倫敦市中に散在せる多數の公園を見ても解かる。一定度以上の大きさを有する市中の公園には乗馬場が設けられてある。此等の乗馬場に於て此運動に熱中せる婦人は中々多い。勿論費用の多きを要する運動であるから中流以上の者でなければ行はれない。此等の公園に足を運びし者は英國人が已に少女の時代から此乗馬に如何に熱中して居るかと言ふ事を悟り得るであらう。馬もちやんと少女用のが用意されてある。婦人が競馬に興味を有

する事著しきも決して理由の無いものでない事が解る。―賭事を別の問題としても―
競馬の際勝を得た乗手は普通銀製の器具を賞品として授かる。これが大した名譽となるのである。

斯くの如くにして僕は名に聞き且英國物語などを讀んで知つて居た競馬を實際に見て其盛な模様を一層詳しく知ることを得た。競馬に關してはまだ述べる事が多くあるけれども、長くなるからこの位でやめて置かう。

倫敦の家庭

倫敦の家庭に於ける品物の購入法は、獨逸に比べると大分違つて居る、獨逸では主婦が、青物市場に出掛けて、買物の品定めを自分に行ふのであるが、英國では主として、八百屋が戸毎に注文を受けて後配達する。但し上流の社會では、召使が買物に出懸ることになつて居て、主婦は獨逸婦人のやうに、囊を下げて物買ひに出ると言ふこ

とは稀である。主婦は時間を節することが出来るけれども、何しろ召使のものにまかし置くのであるから、其間に弊害の生ずることも稀ではない。英國の家庭は一種特別である、即ち英國の家庭では家父を初めとし人を取扱ふに、餘程注意をして、眞實其人の爲になるやうに謀るのである、形容よりも、口先よりも、眞實を第一とするのである。此精神は少しく英國人の家庭に出入したものは、直に窺ふことが出来る。家父は息子のために娘をして樂を奏せしめ、歌はしめ、兄弟姉妹相集まつて樂しましむることを力め、家庭が人生の修養所であり、慰安所であることをシミ／＼幼な兒の頭にしみ込ませるのである。英國の俱樂部生活は、これまた一種特別のもので、青年が一定の年齢になると其好む處の俱樂部に入會し、共同的生活を學ぶのである。こゝでは食事も出来る、娛樂室もある、讀書も出来る、所謂青年の第二の家庭とも言ふべき所であるが、英國の家庭では、青年が俱樂部に出入することを好むは、家庭が十分娛樂的でないからだと思ふ、父も母も、姉妹も皆青年の爲に、あらん限りの力を盡

して家庭内の娛樂にて満足の出来るように力めるのである。或英國通の學者は、英國の家庭は、器械だと云つた何故かと聞くと、英國の家庭は、器械が動くようにチャンと動作がきまつて居て、外の事に涉らぬからだ、と言ふ。召使でも誰でも、雇はれぬ先きから、其家の仕事の量と種類がチャンと解つて居る、規則正しき事は、英國家庭の特徴で、英國家庭は、一の大機關にして、家庭の人々は、其機械に使用される一個の輪に過ぎぬと言ふ人さへある。獨逸の家事は、英國のそれに比べると、もつと自由で英の如く機械的でない、何れにも得失はあるかも知れぬけれども、英國人が、家庭の人々を丁寧に取り扱ひ、人に眞實を盡すことを教へ、家庭を天下の樂園とし、又修養の場所と定めて、道德の根本を家庭生活の上に於て、普及せんと力むることは、我等が取つて學ぶべき要用の點であると信するのである。

歐洲の女子社會

●コーペンハーゲンで大きな蒸氣船の船長になつた婦人がある。此婦人はウオン・バウヂツツと稱し船醫の妻であるが、嘗ても既に大きな荷物蒸氣船の船長をして居たことがあると云ふ。

●獨逸の女記者會は丁度ライプチヒに書籍博覽會が開かれて居るを幸ひ本月總會が同所で開かることに定まつた。此總會では諸種の講演がある外に原稿報酬問題、出版問題、發行書店との契約問題、女子の著述による劇の處置其他の事が討議さる、筈だと云ふことである。

●英國の名物の一として數へらるゝは女子選舉權運動者の行動である。繪畫博物場で巨額の一繪畫が此選舉權運動者の手によつて破壊されたことは遂先程のことで日本の新聞にも電信で報じられて居た通りである。實際倫敦に居ると、毎日のやうに此婦人

連の妄行を耳にする。教會が此婦人運動者の爲に焼かれた事もある。何しろ英國のやうに宗教の盛な國で其教會を焼くと云ふのだからその行動の劇しいことがわかる。

●婦人選舉運動者が各方面に出没するので此爲に巡査の數は非常に増加されて居る。試みに「ナショナルガレリー」などへ行つて見ると多數の巡査が館内に看守をして居るのを目撃する。

●英國に於ける女官吏の俸給。高給監督官で四千五百圓の俸給を受けて居る婦人が一人ある。其他これに次ぎて二千五百圓乃至三千五百圓、これ等は何れも監督官である。内務省には監獄監督者として一人の婦人が居る。この婦人の俸給は三千圓である。年功によつてこれが四千圓まで上るのである。

●商務省にも高給の婦人が居て四千五百圓の俸給を受けて居る。又取引所の中央局には多數の女子が奉職して居て其中の最高俸給は四千圓。これは更に四千五百圓まで上り得るのである。右の外、最高女子視學官の俸給は大したもので六千五百圓である。

衛生局には最高の女醫が居て六千圓を受けて居る。衛生局の監督を勤めて居る婦人は四千圓より五千圓までの俸給を受けて居る。新に發布されし保險令により此所でも多數の女子が採用されることとなつた。最高給者の俸給は一萬圓丁度男子の俸給と同額である。農務省でも近頃女子を採用するやうになつた。そしてこゝでも高給の女官吏は千五百圓を得るのである。

●右の如く女子の高級官吏の俸給は中々大したものであるが、それに反し電話局の高給女官は割合に俸給が少い。何千人と云ふ女子が倫敦の電話局で勤めて居るが二千圓を得る婦人は只一人しか無い。此監督婦人の下に九人の女助手あり。これは何れも千五百圓乃至千九百圓の年俸を受けて居るのである。

●獨逸の女醫會の發企により柏林市内に一の病院が出來た。病床は二十五箇、設備は新式で餘程よく出來て居ると云ふ話である。埃國婦人會は近頃帝國婦人同盟會を成立した。十一箇の地方部會を有し其會員は非常に多いと云ふ。此會の主なる問題は中等

社會の家事經濟を改良し節減せんことを謀ると云ふのである。

●英國にて職を有せる婦人の數は可なり多い、約五百萬人程ある。其中で約二百九十萬人は未婚者、四十一萬一千人は寡婦がある。政府に三萬千五百人の婦人が勤めて居ることは餘程注目すべきことである。市役所で使用して居る婦人は一萬九千四百人である。

外國に居て觀る日本人

●鏡を見て初めて、自分の顔に附いて居る墨を知ると同じく、外國に来て初めて、日本人の有せる特徴と欲典が著しく發見される。殊に歐羅巴の各國を歴遊し、その風俗と人情を見れば日本人が、文明の國民として、努力し、修養しなければならぬ點が、痛切に感じられる。

●僕は既に長き年月を歐羅巴の天地に過した。長く居れば居る程、祖國に對する愛國

の情が盛になり、日本の將來を思うて、眠り成り難きことも一再ではない。樂觀よりも悲觀することが多いからである。

●外國に居て、第一著しく目に立つものは新聞の反響である、新聞記事のうちには笑ふ程の不正確なことを、屢散見する。併し日本人の體面に關する不面目の記事に對して正誤を申込むことの出來ぬものが少くない。

●日本の政事に顯ることにして、外國までも恥を明かにさらしたのは近くは海軍の問題である。これは大きな恥である。惡事千里の諺が、眞理と見とめられなければならぬ程に、世界の人々が知つてしまつた、勅諭を奉じて國に盡すべき帝國の海軍軍人が、斯くまで腐散したとは、實に情ないことである。斯かる問題が、社交の場合に、話題に上り、『何故か』と尋ねられて、穴あらば、入りて消えてしまひたい程に、苦しい思ひをすることがある、取り返しのならぬ不名譽なことである。

●私かに日本帝國の位置と言ふものを考へて見ると、實に日本人は全身全力を盡して

努力せねばならぬといふことが痛切に感ぜらるる、大和魂とか武士道とか言ふものが、外國人の頭に疑を挟むやうになつて來た。

●日本人が世界的になりて、世界の面に活動をしなければならぬことは申すまでもない、學者と言はず、商人と言はず、あらゆる方面に活動を要する秋である。

●近頃のことである。僕は倫敦で一場の講演を試みた、講演の後に多數の質問が出た。僕を困らせた一箇の質問は次の如くである。

●『英京倫敦は、世界の市場である、世界の商人が集まつて居る、故に倫敦兒は、世界各國の商人氣質を知つて居る。然るに悲しむべきことには、日本の商人程信用の出來ぬものは、外國の商人に見ることが出來ぬと言ふ、日本の道德、修身の話聞いて、點と一致せぬのは何故でせう』。

●諸君！諸君は、此質問に對して、何と答へ給ふ。僕は事實でないことを希望する、併し、多年世界の商業界に經驗ある人が事實を並べて説明した場合には、何と返答す

一馬鹿の事

ることが出來ませう。商業道德は、商業の精神である、殊に世界の商業を支配せる倫敦商人にして、此の考を日本の商人に對して持つて居ると言ふことであれば、日本の商業が、世界的發達をなす上に於て、大なる障害となることは勿論である。

●世界的商人とならぬまでも、日本の商人には、まだく缺けたものが多い、例へば獨逸の商業界を見給へ、商業組合が到る處にある。會員は、商店員、會社員等苟くも商業に關係あるものは、これに屬して、斯道の修養をして居るのである。其例を擧げて見ると、各週數種の集會を催す。例へば講演會の如き、運動會の如き、或は豫備教育として語學會、簿記會、速記會等の設けありて、各商業に關する知識を養うて居る。●獨逸に於ける諸種の會の組織は極めて用意周到のもので、外國に於ても同人種間に、この會が、同じ組織で設けられて居る。例へば、倫敦に於ても、獨逸人の組織せる會が二十や三十で止まらぬ程ある。何れも専門事業の知識を謀る外、世界的知識を求むるために、努力して居ることが分かる、日本の商店員、若くは小僧輩に、どれだけ商

業の知識乃至世界的知識があるか、其上に日本人は語學に不得意と言ふ大缺典がある。世界の商業界に活動をせんとすれば、日本人は餘程の大奮發が要る、商人の教育が必要である。商人の道徳を發達して、世界の商業界に大信用を博するやうにせねばならぬ。見給へ、最近の統計によつても、獨逸は近來益日本に多く輸出するのではないか、これに反して、日本より獨逸への輸出は、發達がはかしく行かぬではないか。

●道がは、世界に其權力を敷かんとする獨逸人だけあつて、其計畫、設計、抱負と言ふやうなものが、中々えらいものである、僕は各種の商業會若くは他の獨人會と言ふ様な處までも、只ひとり頭を入れて、其計畫せる所を研究した。日本人が學ぶべき點多きを思つてゐる。日本人は今大奮發を要する秋だと思ふた。

●これも近頃のことである、僕は只ひとり商業會の席に臨んで某教授の講演を聞き、更に多數の質問、討論等を耳にした、曰く、獨逸魂を世界に移植して獨逸人の權力を地球全面に敷くべき義務は、獨逸商人の雙肩にありと言ふのである。見給へ、日本の

商人に日本魂を世界に移植するは、我等商人の雙肩にある義務なりと叫び得るものが、これだけあるか。心細いことである。

●日本國民に普通學の知識の缺けて居ることは、明かな事實である。之は新聞、雜誌にも罪はある。併し國民の罪の方がもつと重い。成る程日本には、國字と言ふ厄介なものがあるが、今はこれを別問題として、論じない。

●先づ新聞、雜誌から言ふと、日本の新聞、雜誌にして、讀者に世界的知識を與へるために、これだけの力を注いで居るか。例へば英國の新聞を見給へ、世界の到る處に、特別の通信記者が置いてある、そして新しい出來事を報道して居る。それから雜誌、例へば獨逸の雜誌を見給へ、寫眞に説明を加へて、世界の出來事、風俗習慣等を讀者に報じて居る。英國の雜誌でも同じことである。

●日本の國民が世界的知識慾に乏しいのが新聞雜誌の罪より大きいであらう。何となれば、新聞も、雜誌も、例へば料理の如く、客の嗜好に應じて造らるゝからである。

●試みに日本の普通の人に、歐羅巴から、英、獨、佛と言ふやうな大きな國をわけて、そして其國々に對して有せる各國の知識を試験して見給へ。及第するものは、果して何人あるだらうか。お隣の支那のことですら、少し詳しく問ふと分らない。

●それに反し、歐羅巴から見れば、日本は少し伶俐な小兒に過ぎぬ。けれども世界的知識を求むることを樂しめる國民は、日本人が驚く程に、日本のことを知つて居る。

●只に世界的知識をのみ言ふのではない、日本人には普通の知識が欠けて居る、これは日本で設備が足らぬ。新聞雜誌の外に、講演、講習と言ふやうなものが盛んに行はれねばならぬ。

盛なる端艇競漕

●世界の運動界の名物になつてゐる英國の「ケンブリッジ」對「オックスフォード」兩大學の端艇競漕は毎年々々この春の「シーズン」にテームス河上で開かれる、英國に於け

るその人氣と來たら丁度アメリカなら野球のオールドチヤンピオンシップセリース世界選手權仕合と同様男と女の差別なく國中を唸らせる、とても日本の本場所相撲處の騒ぎぢやない。

●今年も湧返るやうな人氣の中に三月二十八日、折柄土曜日の倫敦名物の曇天は珍しやカヲリと晴渡つたお詔向きの競漕日和と來たからさア出掛けるは出掛けるは倫敦ツ兒、臨時列車がとつ掛けひつ掛け駛つてもく追付かない。

●もう始まるといふ午後二時前頃になるとテームス河兩岸五哩の間は熱中し切つた見物がビツシリ、其の前には大小の觀覽船が「コース」だけを明けて河上一面を埋めてゐる光景は隅田堤の競漕會など較べるのも恥かしい。

●愈よ兩艇が「スタート」を切つたとなると水陸を埋めた其群集が最員々々を聲援する凄じさ、其中を連年敗續けの「ケンブリッジ」選手死物狂ひの奮闘は遂に見事に劔大學の勝となつた、この間僅に二十餘分間、英國運動界第一の競技は今春は斯の如くして終つた。

●この競漕の斯廢に盛なものには一方で見物が勝敗の賭事を遣るからなんで上流の人士は勿論下は女中に至る迄一年中シコ貯めた財布の底をはたくのだから倫敦では之がため成金になるのや素轉コロリと文無しになるのが尠くない、殊に番狂はせだつた今年は随分その賭けで大騒ぎだつた。

西洋婦人ご酒

悪いことは西洋にも少からずある。飲酒の習慣は蓋し其一つであらう。社交の盛な結果此飲酒の習慣が著しく發達したのでもあらうが、あまりのことに驚かされることがある。

社交と名のつく處には酒と女が在る。女が男と共に酒を飲むことは西洋では當然のようになつて居る。女が飲酒したとて敢て審しむものはない。

獨逸の諺に『酒と女と歌すかぬものは一生を馬鹿者として暮す』と言ふがある。成

る程穿つた諺である。獨逸は麥酒の王國である。麥酒なくては夜の明けぬ國である。安くて甘いと言ふのだからたまらない。其飲方も一通では無い。何しろ日本の盃に比較して何十倍と言ふ大さのコップにてドシ〜と平げて行くのだからはげしい。「プロシート」と稱して健康を祝するのであるが、大杯何十個と言ふ麥酒を一夜の中に平げてはあまり健康にもよくはあるまい。

獨逸殊に「ミュンヘン」は麥酒の都である。此處には大規模の麥酒館がある。數百千の人が押しかけて麥酒を飲み乍らバンを噛ちつて居る。話しては飲み、飲んで話し、半日一日を此館で送る先生が多くある。

麥酒腹は獨逸人の特有物であらう。男にも女にも此便々たる名物腹を有するもの獨逸に甚だ多し。

獨逸では麥酒は水に屬するものと見做されて居ると言つてもよい位である。家庭内で用常せらるゝことは申すまでもなく、赤ン坊に麥酒を飲ませて平然たる母御は到る

處に於て見るべし。

小學校の男女生徒にして毎日麥酒を飲むものの調査は、獨逸の諸方に於て行はれて居るが其結果を見ても如何に麥酒が已に幼少の男女に固着性の嗜好品となされ居るかを知らることが出来る。

舞踏は若い男女には唯一の樂みである。舞踏の席に缺くべからざるもの、一つは酒である。麥酒よりも葡萄酒である。男と女と飲むでは跳り、跳つては飲む。

或人の調査によると獨逸には四十萬の酒客ありと言ふ。——何れの程度を以て酒客と名けたのか解からぬけれども——其中の十分の一は婦人だと言ふ。毎年酒の爲めに死亡するものが四萬人あると言ふのだから酒の勢力の大なることも察せらるる。

獨逸には無數の癲狂院、精神病院あり。此等の病院若しくは治療院に收容せらるるもの、中には多數の小兒がある。其中には兩親の飲酒に基いて居るものが多くあると言ふことも已に證明された處である。現今十萬人の精神病的兒童は、兩親の酩酊時に

受胎せしものだと言ふことである。何と寒心すべきことではあるまいか。

英國に來て見ても矢張り酒が跋扈して居る。英國は階級制度の國であるにより獨逸のやうに富めるものも貧しきものも同じ麥酒館に投じて快談、快飲すると言ふことはない。其上に中流上流の人は普通市中に散在する居酒屋に這入つて杯を手にするやうなことは先づない。倫敦市中に散在せる居酒屋を見給へ。多くは労働者の婦女である。「ウイスキー」と麥酒が主なものである。人若し土曜日の夕、又は日曜日、居酒屋の前に一寸立留つて居れば、男女が酒屋の前で跳つたり、歌つたりして居るのを見るであらう。斯て飲酒は労働者に缺くべからざる嗜好品となつて居る。小兒を抱いた婦人が酒屋に投じてドシ〜飲んでゐる。何とスバラしいことではあるまいか。

英國人は俱樂部生活をして居る。上中流の人々は、此俱樂部で會合する。そして矢張り飲む。高尚なる社交と稱せらるる處には必ず高尚なる飲物あり——高尚とは此場合只高價を意味す——着飾りし姫御前がドシ〜と杯のお交りを出し給ふ、一瓶の價

十圓二十圓、紳士が囊底を叩くことの稀ならざる以て察すべしである。

倫敦市中にて酒に酔つて狂へる婦人の群を見ること決して稀ならず。

佛蘭西人の酒を好むことも有名である。今より約六十年前、人口三千六百萬を數へた時、同國の酒精飲料消費は、六十二萬二千「ヘクトリール」であつたが、人口三千九百萬を算する今日、酒精飲料の消費は、六百萬「ヘクトリール」に達した。即ち十倍に達した。中々の大發達である。何しろ佛蘭西人のことであるから飲んで飲んで樂天的に暮すことが幸福と見做るのであらう。が年々酒の爲めに拂はるゝ費用が三百萬「フラン」に上ると言ふのだからすばらしいものである。酒信者の中に女が多數居ることは申すまでもないことである。

日本にも酒は百樂の長と言ふ諺がある。悲しければ忘れんとて飲む。樂しければ祝すとして飲む。集まれば飲む、獨りなれば獨酌と洒流る。兒が産れては申すまでもなく、人が死んでも飲む。

飲酒の習慣は西洋の反對に何んとか撲滅法を講じて見たい。日本には體育の改良若しくは人種改良、或は人種衛生と言つたやうな方面に國民の努力すべきことがある。日本婦人が幾千年惡しき習慣の爲めに被れる非生理的の體格を學問の進歩と婦人の努力によつて排除すべきことがある。

日本の婦人が西洋の婦人の如く酒を飲まざるは喜ぶべきことであるが、若し西洋と同じ事情の社會生活なりたらんには果して日本婦人が今日の如き状態に止め得たりしや否や一寸疑はしい。何は兎もあれ。西洋で酒が男女の間に、若しくは健康上、若しくは經濟上恐るべき悲劇を演じつゝあるは寒心の至りである。日本の若い男女は酒なくして樂しみ得る國民となる様心掛けねばならぬ。『酒は百毒の長』と言ふ日本の諺が眞理として國民に喜ばれるやうにならねばならぬ。

英國人の仕事表

●最近の統計によると、英國の人口は千三百六十萬の男子と、約千五百萬の女子である。最もこの中には十歳以下のものを含んで居ない。右の中で一定の職業を有して居る男子の数は、千百四十萬、女子は四百八十萬もある。職業を有せざる千萬の女子中約六百萬は結婚し、約百萬は寡婦である。

●英國人の仕事表を一寸窺つて見ると次のやうな成績が出て來る。

●十歳乃至十四歳の小兒で仕事をするもの、数は近頃非常に減じて來た。それでも十萬餘（五・二%）もある。婦人一萬人中十年以上自活の道を講じて居たものは千九百一年度に三千百人、千九百十一年度に三千二百人。此三千二百人中九百人は召使で、五百人は裁縫師、四百人は紡績業、各百餘人は教師、食料品販賣、洗濯婦である。

●家庭の召使として働いて居るもの、数は、百三十萬もある。其中女子は百二十六萬

人を占めて居る。併し此召使の数の比例は人口増加に比較して見ると増しては居ない。即ち千八百八十一年には千軒の家庭に二百十八人の召使人が居たが、三年後にはこの数が百七十にまで減じた。

●農業に従事して居るもの、数は男子百十三萬女子九萬四千。興味ある現象は、英國人の農業に従事するものが大に減少して來たことである。千八百八十一年には人口百萬に就き七萬人の農業者が居た。處が千九百十一年には僅かに四萬五千人に減じてしまつた。

●官吏の数が非常に増加したことは注目すべきことである。英國人は獨逸や佛蘭西の官吏の多きを笑つて居たが、此拍子では餘り笑ふことが出來なくなつた。千八百九十一年には英國に於ける官吏の数は、郵便、電信、電話に關係せる官吏を除いて七萬九千人であつたが今日は十六萬二千人にも達した。警察官の数は四萬四千九百から、五萬三千に上つた。

●地方官廳に官吏として就職せるもの、數は今日五十八萬九千を數へる。此數の中には中央政府、陸海軍に關するものは含んで居ない。

●其他にまだ種々の職業別がある。例へば石炭業(九十七萬人)、建築職(八十二萬人)、木綿工場(六十二萬三千人)、鐵道(五十四萬三千人)、機械工場(五十一萬人)、裁縫工業(三十三萬七千人)、教師(三十萬人)の如きこれである。

●人口百に對する職業比例を造つて見る。その割合が一層明確に解る。一つ、二つ試みて見やう。官吏と教師の數は、人口百中各一人。六人は家事、三人は商人、三人乃至四人は鑛夫。五人は金細工又は機械師。三人乃至四人は家を建て、四人乃至五人は、紡績業に従ひ。五人は日用品を販賣すると言ふ勘定になる。

●宣教師の數は、千九百十一年度に於て四萬餘人。醫師二萬四千五百、辯護士が二萬千三百、俳優が一萬八千二百餘人。此數は十年前に比較すると六千人の増加を示して居る。芝居の繁盛せること以て察すべきである。

倫敦兒と「ハイド、パーク」

●倫敦市中若しくは市外に存在する公園の數は夥しいものである。其中には大きな公園が數多ある。一度足を運ぶとこれが煤煙の都倫敦市中だと一寸思へない位である。

●「ハイド、パーク」は、多數の倫敦公園中面白いもの、一つであらう。公園が面白いとは一寸受取り難いかも知れぬが、「ハイド、パーク」には倫敦兒の生格がアリ／＼と揭示してあるからである。

●實物を見ない人に其模様を明瞭に説明するのは一寸骨が折れるが、少し計り試みて見ませう。

●「ハイド、パーク」は倫敦市中の西區に存在して居て、繁華を極むるオックスフォード街、ピカデリー街、ウイクトリア停車場から程遠からぬ處に在る廣大なる公園である。

●英國の公園は言はゞ殆んど自然のまゝである。公園内の花園を除いては殆んど手が加へて無い。「ハイド、パーク」も其例にもれぬ。見渡せぬ程廣い原野に、アチラにコチラに、ポツリ／＼木が立つて居る位なもので、花園を除くの外は何處でも濫入を許可し、芝生は人の靴に踏まれてつらい厭味を凌がねばならぬ。

●英國人は『自由』を貴ぶ國民である。「ハイド、パーク」へ行つて見るとこれがよく解る。先づオックスフォード街から、公園の門内に入ると、そこには多數の路上演説が行はれて居る。朝から夜更けるまでブツ通しである。殊に夜の六、七時頃からは、十數組の演説會が開かる。一寸其種類が面白い、曰く宗教演説、宗教反對演説、動物虐待防止會、女子選舉運動演説、曰く何、曰く何、數百の人が集まつて騒ぐ。英國人も饒舌る事が好きである。演説の途中に討論、質問等をやる。傍からハヤし立てる。時にはドットと鬨の聲を擧げる。何しろ十數の辯士が卓を並べて辯論をする上に時には反對の演説がある。そこでお隣りの辯士に喰つて掛り辯士同士の論難攻撃となり。

●聽集がこれに和する。日曜は人出の多き爲め此演説場所が更に公園内の廣野に移される。

●辯士の中には勿論婦人もある。聽集は擧げ足を捕へんこと計り考へて居て、機會毎に質問を發する。一寸他の國では見られぬ圖である。

●また此公園の中には湖水がある。端艇漕は英國人の好きな體育遊戲の一つである。

●婦人も男子と同様に此水上で端艇をこいで楽しむのである。

●公園内には音樂會堂がある。夏は夕刻こゝで奏樂がある。幾百千の椅子が音樂堂の周圍に並んで居て、日曜日とでも言へばこれが皆聽集に占領せらる。席料一「ペンニ」を拂へばそれで音樂が開けるのである。

●倫敦の大公園には必ず乗馬場が附屬して居る。「ハイド、パーク」にも大きな乗馬場が設けてある。朝の中、若しくは夕刻には盛に乗馬の練習が此處で行はる。練習者の半分は婦人である。英國婦人程運動に熱中するものは他の國民に無いかも知れぬ。

乗馬場の兩傍には幾百千の椅子が並べられ、日曜の如きはこれが悉く観客に占領される。

●「ハイド、パーク」には、各種の人々が集まる。そこで一寸人間學の研究をして見たい等思ふ好奇心者には好佳の資料の一たるを失はぬ。夜更けて芝生の上で横臥して眠つて居る人もあるかと思へば、汗を流して演説して居るものもある。舟をこぐ、音楽を聴く。馬に乗る。其中でも一番興味のあると思はるゝのは、千態萬狀の人を見ることである。向ふの方からは勿論毛色の異なる僕等を見る。其代りこちら一寸其間に失敬して先方の人相を窺ふ。

●僕は何時でも好んで此處へ人を見に行く。又演説を聴きに行く。これはかたゞ語學研究の扶けにもなると言ふ副産物も得らるゝからである。そこで僕も大分「公園英語」なるものを學んだ。月謝や入場料を要せざること一寸便利である。

男女合戦

男女の合戦の劇しき恐らく泰西に及ぶものはなからう。『男女の合戦』とは何事ぞ。

西洋では若い男女も交際が自由で手に手をとつて散歩も出来るではないか。女人の前には如何なる男子も頭を下げるではないかと。ウエル、一つ説明をして見ませう。

日本人などの目から見ると、泰西の女子のうちには男性化した女子が中々居る。――

――日本では丁度反對に女性化した男子が増すと言はる――泰西の女子が男性化するの
は止むを得ぬ社會の現象かも知れぬ。亞米利加などでは女子の巡査が居る。泰西にも
電車や自動車の運轉手が出來た。女子自ら自轉車に乗り、馬に乗ることは、通常のこ
とである。女子の飛行機乗も居る。英國には女兵士がある。「ピトスル」の用ひ方な
ど練習してゐる。現に英國皇后陛下は騎兵名譽聯隊長だと聞いて居る。尤も自轉車乗

りや、馬乗りは娯樂を主とすることで、男女合戦の理由ではない。只女性が男性化した例を挙げたに過ぎぬ。男女合戦の原因は、職業難である。職業難が男女合戦の導火線である。生活が困難になる結果、何人も職業を求めらる。然るべきものが得られなければ、勢ひ女性に不適當なものでもやらねばならぬ。「餓えたるものは食を選ばず」である。其結果女子が大に男子の業務範囲へ踏み込んで来た。見給へ、女子にして法律家たり、醫家たり、宣教師など言ふもの益々數を増すではないか。女子の運轉手、巡查など餘程男の領分へ切り込んだものと見てよからう。其他靴屋あり。鍛冶屋すらあると言ふ世の中である。「背に腹は代えられぬ」仕事が出来れば生存が出来ないと言ふのである。女らしくして居ては泰西では暮すことが出来なくなつた。電話交換手、「タイピスト」の如きは、今では殆んど女子のみの業務範囲になり終つたかの姿である。

何は兎もあれ、男子の業務範囲が女子に犯されるとなつて見れば、男子も爾ふ浮々

として居れぬ。「お手本御用心」と言ふ時代になつて来た。現今は選職難から、就職難へ涉り行く有様になつた。職を選んで居ては思ふものが得られぬ、何でも宜い。「後の百より今五十」の世の中である。そこで男も女も腕まくりの姿で鵜の眼、鷹の眼で、業務探しをして居る。男が女に先じられると、その男は失職の非運に逢はねばならぬ。まるで旗取競争のやうなものである。早く走つて行つたものが所定の旗を握り、賞品を受ける。後れた奴は、指を噛んで呆然たる不面目に陥るのである。然るにこれが遊戯にあらずして、實際生活、「パンの種」、「生死の問題」と来て居るのだから溜らない。僕が稱して「男女合戦」と言ふもの理ではなからうか。

泰西には多數の婦人會が出来て居る。其中で近頃社會問題を研究するものが大に増加して来た。殊に婦人問題に就て八ヶ間敷言ひ出して来た。給料のこともりに論せらるゝやうである。

職業のうちには、男子の代りを女子の手で出来ぬものがある。又女子の職務の中に

は男子が出来ぬものがある。併し男でも女でも出来る職業の範囲は非常に廣いのである。若しこの範囲内に來て働く女子が多くなると、男子に影響が及んで來る。男子の方でも勢ひ自家防禦を致さねばならぬ。男子が自家防禦を致したとて、生活難と云ふ恐ろしいものに追はれて居る女軍は、それではと言つて男子職業圈内への職業乗取攻撃を中止するわけには行かぬ。

男女の職業範圍も近頃は大分動搖して來た。昔は男子職業範圍と定まつて居たものも、今日では、女子がドシドシ詰めかけて來て、平氣でやつて居る。

何れ戦さと云ふ以上は、劇しいものである。遊び半分ではない。『男女の合戦』は、生活問題から出て來たのである。

泰西に於ける男女の合戦は、益々混戦の姿に赴くことであらう。落伍者や、負傷者の多く出ることば當然のことである。勝利の功名を誇るものもある中に武運拙くして敗戦、又敗戦、所謂落武者の果てが、露宿の生活、はかなき浮世を秋の枯葉の散る如

くにして身を果るものは益々増して來る。倫敦などには何百萬と言ふ餓饑軍が居ると言ふではないか。これ皆浮世の落武者である。再び戦ひの出来ぬ武士共である。

英の人、獨の人

獨逸人は口癖のやうに「英人は馬鹿だ」と言ふ。『英國の小兒はど馬鹿な小兒は外に無い』と言ふ。

僕或日某獨逸人會に臨む。席上人あり、衆に告げて言ふ。

「茲に二個の林檎あり。これを三倍すれば幾個となるや」と問ひしに英國の一小兒六個なりと答ふ。何故ぞ」と問へば知らずと答へたり。若しこれが獨逸の小兒ならんには、二個に二個を加ふれば四個となり、これに二個を加すれば六個となることを證明し得べきや明なりと。

傍に人あり。『若し君にして五頭の牛と八頭の豚を合すれば何頭となるやと問ひ給ひ

しならんには、必ずや其小兒は十三頭の豚と答へしなるべし』云。
一坐大笑す。

敏捷にして智にたけし點は獨逸人確かに英人を超ゆべし。獨逸人は二と二と合して四個となることをも科學的に證明せんとし。英國人はそれは分り切つた事だ、四個だから四個だ。證明などは要らぬと言つた風である。

獨逸人の頭は幾何學的である。何事でもこれを科學的に分析することを力める。英人は總括的である。常識的である。そこが英獨逸人の相別るゝ處である。

一種の事柄を科學的に考へる場合には必ずやこれに思索が要る。一を解すれば又一の問題が出来て来る。これが進歩の種となるのである。獨逸人は此點に於て確かに進歩主義である。書

一個の事物を研究するには、必ず二個の異つた方面から考察する。例へば利害の方面、便不便の方面、大小の方面、上下の方面、價あるものは上下の程度等である。そ

してその分析の結果、若し良好であれば忽ち實地に應用する。獨逸人の實生活に於て科學的應用の進歩せるは此爲めである。

英國人は獨逸人に比すれば、餘程保守である。靜的である。科學的の方面に於ては、逆も獨逸人に及ばないやうに見える。

例へば獨逸の商人は大抵英、佛語を話す、けれども英人は英語の外に外國語を研究するの精神は非常に乏しい。英語は世界語と自信して居るからでもあらうけれども、そこによく英人の保守的精神が現はれて居る。

英國人の無愛想はまた獨逸人などに比べると一段目につく。併し無愛想が必ずしも人間の性格に關する歌典を意味するものではない。

人格と言ふ點に於ては獨逸人はどうも英人に一籌を輸せねばならぬと思はる。『ゼントルマン』と言ふ言葉は英人の頭腦に多年刻まれて來たものでこれが英國民の大をなして居るのであらう。

獨逸人を蛇の如く敏しとすれば、英人は鳩の如きものかも知れぬ。

坐る國民、立てる國民、歩む國民

英國人は舊を守る民である。「保守」である。「自負」の民である。「既成の民」である。現在に満足して居る國民である。將來も現在の如くにして暮して行かうと望む民である。進まぬ民である。退かぬやうに勉めて居る。進退せぬのが英國民の現状である。「現状維持」である。「立てる國民」と稱せらるゝ所以である。

獨逸人は進取の氣象に富める「未成の民」である。次から次へ進み行ける國民である。「歩める民」である。將來は現在よりも前方の地位に居る國民である。「進む」外には何事も知らぬ民である。「脇目せず」に走る國民」である。

敢て問ふ。諸君！日本の民は右の何れに屬せるや、曰く後者なりと、諸君は言はん、勿論「進める國民」なり「歩める國民」なりと。然り々々、併し實際坐つて暮して居る國

民である。

僕は日本人種を改良せねばならぬと切に思ふ。坐る習慣が身體の發達を妨げて居ることは事實である。動作の敏活を障礙することは實際である。忙しい世の中に坐つて生活するなどは以ての外である。坐る國民は自然「無性」になる。用事をするに先づ「立ち」然る後「歩む」の二動作を要するからである。「立つて」居れば只「歩む」ばかりである。

座る生活は、その外に時間を失ふ。生理上にも不利益がある。これが人種衛生に害をなすのだ。

冬にでもなると日本人は「炬燵生活」をする。經濟だと云ふ、何の經濟だ。炬燵等日中もぐり込める連中に限つて偶々外に出ると風の神に咀はれて、コホン、コホン呻り出す。醫者に行くと「藥九層倍」の價を取らるるでは無いか。甚だしきは炬燵生活は風流だなどと云ふものあり。風流もそれ丈け下落すれば、乞食の業も風流であらう。

日本人が時間の經濟に不得手なることは、世界的である。世界の人を知つて居る。成る程日本人はよく働くこと云ふ。西洋人より働く時間が永い。西洋人が毎日八時間働ける間に日本人は十二時間も働く。一寸外聞はよいが其仕事の量が同じことであると聞けば、餘程時間の用ひ方が下手と言はねばならぬ。それでは保養の時間が西洋人よりも餘程少なくなつてしまふ。日本人だつて休息を要する事は西洋人と同じである。見給へ日本人は日曜すら一般に實行し得ないではないか。日本の一日も、西洋の一日も同じ二十四時間である。『時間のむだつぶし』を實行して顧みざる國民は禍なるかなである。

『座る國民』の日本人は、毎日多數の『時間を棒に振り』つつあり。一面から言へば『時間的自殺』である。若しくは『人造的生命短縮法』を實行しつつあるのである。

文明は國民の精力を父とし時間を母として生れたものであらう。父が健康でも母が病身では文明と言ふ息子には影響するところが多い。日本人が不老不死の泉を發見し

得ざる以上は、時間を貴重品扱ひにすることが當然である。見給へ今日の日本人などは年をとると西洋人などの元氣に及ばざること多く、日本の男が六十近くになると『ヤレ隠居』だと云ふ。何たる愚の業ぞ。日本の婦人が年をとると年以上に老けて見ゆる。西洋人は言ふ。日本の婦人は家の中に座る生活を續けて保養の餘裕を造り能はざるためだと證明せんとする。諸君どうしたものであらうか。

日本の文明は進歩した。もつと進歩せねばならぬ。それなら座る生活など止めて腰掛ける國民、立つて仕事する國民に移らうではありませぬか。脚だつてもこんな短くては走り競べをしても西洋人の方が勝つではないか。人に負けては意氣が沈む。

今の時代は『起て』『起て』と日本人を勵ますではないか。精神のみならず身體も起つた國民にならねばならぬ。

英人の書面

日本人が事務用と交際用との訪問を混じて、二、三分間で済むべき用事にも三十分、一時間、若しくは數時間を費して平然たるものたるは、日常我等が經驗せる所なり。斯かる習慣は文通上にもよく現れて居る。詰らぬことを長々しく書くこと日本人に優るものは無いであらう。獨逸語は日本式より餘程短單である。併し英人の書面に比すれば、山鳥の尾たるを免れず。日本ではあまり單短な書面をかけば失禮に當るかの如く思ふ風あり。以ての外のことである。

英人の普通書く書面は、日本で言へば所謂電文的である。英人は回答を要する書面に對して直に返事を出さんことを務むるやうである。假令三行半に充たざる文書でも要領を得ればそれで済むのである。日本などでは、會の幹事でもやつた人は必ず實驗して居る。往復端書で出席の有無などを問合す場合でも返事を遂によこさぬ人少から

ず。返信用端書を盗むはまだしもとしても會の準備に及ばず幹事の迷惑一方ならず。名けて『幹事泣かせの會員』と言ふ。日本には何れの會にも此種の會員存在して居る。

日本人の手紙には返事の後れたる理由を長々と書く人あり。本當の用向を書いて其時に返事して置けばお詫び文句の半分位にて用は足りしものを。

英國人より受取れる書面のうちには電文的のもの多けれども、意味はそれにて通じ、用はそれにて足れり。例へば『よろしい。明日参りませう』。又『明晩何時私の宅で夕食を致して下さらば結構です』、又『どうです、明日好天氣ならば何時から一緒に散歩しやうではありませぬか。』と言ふが如し。その要領を得たることを見るではないか。日本人の『捨て置き主義』、『放ッ散らし主義』、『幹事泣かせ主義』、『返信端書只取主義』など一に『無責任』の罪に出づ。戒むべき事なり。

英人は獨人などよりは書面用に厚き且善良の紙を用ゆ、新聞紙の如き書籍の如きもまた此傾あり。最も外國行の書面には郵税の都合にて薄き紙を用ゆ、Foreign note pa-

Postと稱せらる。英國人が普通文書に厚き紙を用ゆるは此郵税の關係にも基づけるなるべし。内地の書面は、百二十「グラム」まで只の「ペンニー」にて届くなり。これを獨逸の二十「グラム」までを十「ペンニヒ」に比すれば便利なること太だし。

日本人には一寸面白く見える手紙の書き方あり。英國にて行はる。第一人稱を第三人稱にすることである。例へば林と言ふドクトルが書面を認むるに此方式を用ふる場合を想像すると。

ドクトル林は、何々店(宛名の店)より何々の品物を買はんことを望めり。よつて林は念の爲め一度その品物を見たし。見本品として御序の時に御届を乞ふ。云々

と言ふが如し、此方式をとりし場合には書面の後に林某の署名をする要なし。教育の足らざる人が此方式を用ひて大滑稽を演ずることあり。初めは自分を第三人稱にし後に第一人稱を以て來て、「樹に竹をつげる書面」を送る人あり。見本を舉げて見ると一寸左の如し。

ミツセス林菓子を造りミツセス森に送る。これ私の手製にかかる。若し貴下の御嗜好に適せば結構なり。

前半と後半は樹と竹の次ぎ合せである。第一人稱と第二人稱は此式の書面には一切禁物である。

英人の書面は普通 Sir, Dear Sir, Dear Madam, Dear Mr. Jonson, My dear friend, なごを以て初めらるる。書面の結び文句は普通 I am (獨逸語の ich bin) 或は I remain (同 ich verbleibe) を以て初まり、行を新にして truly 又は faithfully 若しくは sincerely なごと言ふ句に yours を冠せ、其下の行に署名するのである。これほんの普通のものにつき只一斑を挙げしのみ。

『拜啓』と云ひ『頓首』と云ふ日本の習慣などを悉く西洋の夫に換ふるの要はなかるべし。併し不用とも見做る文句などを長々しく書くことを止めて、短刀直入に改むるやうにしては如何、事務を單簡にし、チャキ／＼と早く整理すべきは、文明の世が要

求するところのものである。「放ッ散らし主義」、「無責任主義」は耻づべき主義である。「非文明主義」である。

英國の美人

英國の民もお多分に洩れず、左手に黄金を握り、右手に美人を得んとす。獨逸には美人多からず、英國に来て一層少なきを覺ゆ、人若し午後倫敦の交通劇しき街上例へばビガヂリー又はオックスフォード街頭に立ちて女六分男四分若しくは女七分男三分の割合にねり行くを見、着飾れる人の中に如何にも美人の少なきを發見するであらう。自分免許の美人の數は、それ程に少からざるべく、英國人より見れば其中に尙ほ多數の美人あるやも知るべからず。英國の女は獨逸の女子に比して其型を異にすること夥し。他の國殊に獨逸などより來て第一に著しく目につくものは、英國婦人の細くして且長きにあり。これは頗る日本型に似た處がある。獨逸婦人は山の芋の如く、英國の

婦人は日本の所謂柳腰である。獨逸人の目には英國の婦人が如何にも細く見ゆるなり。呼んで英國婦人は實にミゼラブルだと言ふなり。英婦人の顔貌も細くして長形なり。髪は比較的黒きもの多し、——或は染毛なるべきや、これは保證の限りにあらず——獨逸にて、顔に白粉などぬる人は、藝人を除いては殆んど見られず。英國に來ると塗るも塗るも、極めて厚化粧なり。一體顔の化粧は、西洋人は、日本婦人などにくらべては上手である。併し五十若しくは六十面をして厚化粧を致されては、外より見て一寸滑稽である。自ら吹き出したくなる。

骨格の立派なる點は獨逸婦人は遙に英婦人に優つて居る。人は言ふ、英國の婦人はあまりに運動を好む。馬に乗る。端艇を漕ぐ。水泳ぎをする。「テニス」をやる。其度は逆も他の國の女子に譲らず、其上に肉を食する度も大なり。これ英國婦人が肥り能はざる所以なりと。果して首肯すべき説なるや疑はし。

英國婦人中眼鏡を用ゆる人極めて多し。僕は若き婦人に斯くの如く多く實際近視眼

者ありやを疑ふ。併し幾分多きことは事實なり。小學校に行きて見ればその近視眼者の多きに驚くべし。

英國婦人の鼻の形、目の形は甚だ善し、下顎のよく發達せることも目につくところである。獨逸婦人のうちには齒牙の悪しきもの甚だ多けれど、英婦人の齒は割合によく揃ひて奇麗である。恐らく食事に關係あることと思ふ。併し英國婦人の顔が『畫のやうに』と思ふこと極めて少し。西洋婦人のうちには八字鬚の堂々たるものあり。女の鬚は馴れざる勢にもよるべけれど至つて氣味悪き心持す。女が我が容姿を保たんために心を悩ますことは、昔も今も、東も西も同じことと見ゆ。獨逸などでは、『瘦せ薬』の廣告到る處にあり。病院に通ひて『瘦せる治療』を受けつつある婦人少からず。茶を飲めば瘦せると言ひ、菜食も瘦せると言ひ、曰く何、曰く何、瘦せる事なら少々の不便は素より忍ぶと言ふ。堪忍の不得手なる西洋婦人に敢てこの事を見る。容姿の爲めに心膽を碎くの甚しきを察すべきではないか。

纖腰は果して英國人の美の條件に一致するやは知らず、併し『瘦せ薬』よりも、『肥り薬』の方が英國婦人には必要である。言ふまでもなく實行せる婦人多かるべし。

國民が有せる美の標準は其國々によりて一定せざることは事實である。僕英京倫敦に於て一牧師の家に招かれて夕食を共にす。席に年若き一人の娘あり。此娘辭して家に歸りし後、牧師予に問ふ。『どうです。あの娘は美麗だとお思ひになりますか』と僕曰く、『エース、ヴェリ、ナイス』牧師更に言ふ、『あれ程の美人は千人中一人か二人かしかありませんね』僕私かに英人の美人と稱するものと、日本人の余が見る處と大差あることに驚いた。僕は只十人並の娘と見たのであつた。予の目にて若し大々の美人を見出して英人に示さば、或は十人並と稱するやも知るべからず。予は爾來美人を評價することを廢してしまつた。——蓋し危険なればなり——

英國雜觀

英國人の口は煙筒に似たり。英國人の喫煙を好むことの甚だしきは英國に遊ぶもの直に知るところである。木製の短かきパイプの雁首は日本にて用ゆる煙管に比すれば恐らく十數倍の量をつめ込むを得ん。これに火をつけてスバくどやるなり。煙草の質は極めて強きを普通とすと稱せらる。その香りだけにてその強性のものたるを知る事が出来る。英國人は煙草なくては夜を明かし得ぬ國民の一つなり。朝床を離れてより、夜再び床に入るまで喫煙をするなり。然れども一つの除外例あり。婦人の前にては婦人の許可なくして喫煙する能はず。——英國の婦人にして喫煙する人少からず——宴會等婦人の男子と共に在る場合には、食後婦人先づ別室に去り、男子のみとなりて後、初めて安心して喫煙し、然る後更に婦人室に入りて交談するのである。

ものも少からず。小兒を連れて居酒屋に入ること許されず、その爲め屋外にあつて小兒を懐きたるまゝ、麥酒の杯を傾けつゝあり。居酒屋の前で喧嘩の初まることは決して稀ならず。女のわめき騒ぐ聲など決して珍らしくはない。英語の所謂 He (she) is hopelessly drunk 若しくは He (she) had a drop too much と稱するものである。日本で所謂「ハー一杯きこしめたナ」とは、英語で、"He (she) is a little on" と言ふ。この程度の男女は街道到る處にあり。予は單獨散歩の際、居酒屋の前にて「飲んだくれたる」多數の女共より放圍され、僕の袖を握りて離さず、相戯れんとするに逢ひ、困つたことあり。土曜又は日曜日の夕など大道にて「飲んだくれ」の女軍が廻り兼ねたる舌を動かして、流行歌など謳ひつゝ、ねり行くを見るなど珍らしからず。

珈琲は英國に於て勢力少し。倫敦などには、珈琲店 (Coffee-public-house) の存在するもの少からず。然し英國人は珈琲よりも茶又は「カカオ」を愛するなり。珈琲の味は、埃國や獨逸などに比して大に劣つて居る。家庭に於ても珈琲を用ふること稀にしかると言ふ。

て茶を用ふるなり。故に獨逸などで「珈琲に招く」と言ふ處を英國では「茶に招く」と言ふ。茶は今日既に英國の國民飲料と名けらるやうになつた。「ナイフ」と「フォーク」のある所には必ず茶器を見出す。茶の飲み方は日本のそれに比して大差あり、砂糖と牛乳を入れて飲むなり。茶のみ飲むことは無し。英人は主として煮ざる牛乳を茶に用ゆると言ふ。

倫敦兒の娛樂。倫敦は、一面より見れば飢餓軍の屯する都である。然れども一面から見れば黄金の光り強き都である。餓えて泣くものあり。喜びて遊び戯るものあり。倫敦の上流社會にありては、年中品を換へ、手を換へて娛樂を求むるのである。倫敦兒の娛樂は個人的のもの少からず。倫敦名物の一つは乗馬である。倫敦には多數の大公園あり、これが大抵乗馬場を有して居る。朝の間と夕方に男女茲に來りて乗馬の樂みを貪るのである。試に日曜日「ハイード、パーク」に行きて見よ、多數男女列をなして馬を走せ居るを見るべし。

午後になりては夫婦自用の小馬車に乗りて自ら馬を馭しつゝ公園内を走り行くもの少からず。

倫敦兒が競馬の爲めに現を脱かすことは世界に名高けれど、實際は想像以外である。日曜日などには、自動車、自轉車等を利用して郊外に散策を試むるものは極めて多い。倫敦に於て夫婦乗の發動自轉車あり。男子楫を取り、女子は其傍の籠状のもの、中に坐するのである。

大抵の公園内には音樂堂あり。一定の日に限りて音樂會開かる。「ハイード、パーク」内の音樂堂の如きは數千百の「ベンチ」を有し夏は夕方より晚くまで音樂會の催しあり。集り來るもの引きもきらず、芝居も中々盛なり。寄居などの中には水曜日、土曜日に限り二回宛開かるものあり。これ兩日には午後には休業の人多きによる。倫敦は世界的都なれば各國の芝居も見ることが出来る。されども夏の倫敦は、實に淋しくなる。避暑の爲めに地方に赴くからである。芝居の一部分は閉ぢらるゝのである。

英國は遊戯の本場である。男も女も體育的遊戯に熱中すること並も他の國にて見ることが出来ぬ。曰く乗馬、曰く端艇、曰く「フットボール」、「ベースボール」、「ローン、テニス」、曰く自轉車、曰く游泳、曰く何、曰く何。

社交生活の盛になる結果、娛樂の種類も益々増加して來るのである。娛樂と名の附くもの、殆んど全部は男女共に行ひ得るものである。男子のみのもの、女子のみのものもありては、その發達若しくは流行の上に顯著なるもの稀なり。

倫敦市街。伯林などに比しては、倫敦の市街は整頓若しくは清潔の點に於て及ばざること遠し。倫敦は極めて不規則な市街である。街道の多くは非常に狭い、その爲めに電車の通ひ得ざる所多し。街道の構造は木、「アスファルト」又は「マカダム」である。交通の劇しき場所には、交叉點に歩行者の爲め特設の場所あり (Refuges 若しくは Islands と稱せらる)。街頭に立つて交通を指揮せる巡查の數は極めて多い。交通織るが如しとは倫敦の市街を指して言ふことである。往來の頻繁なることは世界此右に出づ

るものなからん。

交通頻繁の場所に於て道を横切らんとすることは馴れざるものには命懸けの仕事なり。小兒、近視眼者、盲者、歩行不自由のもの等は特に査公の手に扶けられて初めて道を横断し得るのである。

街道の修繕は多くは八月の中旬に於て行はるゝのである。これ倫敦見多く地方に避暑し、交通の頻繁其度を減ずると、一方天候の此等の業に適當する爲めであらう。通行止 (Closed) の立札到る處に見るべし。

倫敦市の心臓部には交通の頻繁の場所多し、殊に交叉點に於て然りとす。待つこと多時にして而かも横切り得ず、地下鐵道の交通路を應用して初めて目的を達し得ることあり。倫敦市の中樞部で散歩などすることは最も適せず。斯かる場所には善からぬ人散在して往來の人より金錢を捲ぎ上げんとするもの少からず。殊に外國人を目標とせる場合多し、時に先方より何かと言ひかけて來るものあり。「何か用事ありや」など

と呼びかけて仕事の綱を造らんとす。此種の悪手腕にかかりて料理店に導かれ、飲酒 (to have a glass) を餘儀なくされ、剩へ金をせしめられしもの外國人に少からずと言ふ。油斷のならぬ世の中では無いか。

街●上●の●音●樂●。倫敦市を見るものは到る處に街上音樂を聞くべし。小さき疎製の「ハルモーニウム」、若しくは手風琴、其他の樂器を用ひて路傍に立ち道行く人よりの寄附を待つのである。其中には夫婦の音樂者あり、夫奏で、妻吟じて、路上をねり歩き行くものもあり。「スコットランド」音樂、獨逸音樂なども街上にて聴くこと稀ならず。此種の音樂の上等にあらざること勿論なり。

路●上●説●教●。これも亦倫敦の名物なるべし。日本などでは只僅に救世軍の路上説教を見るに過ぎず。倫敦に路上にて説教せる福音者極めて多し。聖歌書を聽集に類ち特に運搬に便せる「オルガン」と講壇とを路上に据えて往來の人に道を説くなり。寒さも厭はず、暑さも忘れて神の爲めに働く人の熱心は感すべきことながら、そのうちには

Certainly, 等である。英語の「御免下さい」は Excuse me, pardon me, 又は I beg
Your pardon と言ふ。獨逸語にて驚きの意を示すに So? — 日本語の「アラ、マー、爾
ふですか!」——を英語にては Indeed? Did he? really? you don't say so 一婦
人又は教育少ない人などに Oh my を繰返すもの少からず、Oh dear も屢々應用せら
るる語である。Did you ever? Oh, I never 一等其他之に類したる語少からず。獨逸
などにも斯かる場合の言ひ現し方非常に多し。

英國婦人は市場に出でず。獨逸では上下の社會を論せず、家婦市場に行き、所用の
品物を自ら選ぶを常とすれど、英國にてこの風甚だ少なし。其かわり肉屋、パン屋、魚
屋、青物屋など戸毎に來りて注文を聞き歩くのである。これによりて主婦が時間を省
き得るの利益少からねど、一方には又損失もあり。即ち所用のものにて特に商店に求
めざるべからざるものあり。斯かる場合には家婦その召使を送るを普通とす。其間に
召使の自ら私するものもあり、大なる家庭では賄方の外で調理品一切を請負ふものも

あり。召使のものの中には、先づ約束の前に買物の規定を問ふものあり。これ自己の
收入に豫算を立てんが爲めである。

犬の家。西洋の人が動物を愛することは犬などを同じ寢室に入れ、剩へ我が臥せる
床に入れて眠らせるを見ても知るべし。西洋の犬は我國の猫の如く取扱はれるのであ
る。倫敦には犬の家 (Home for Lost Dogs) あり、主人を見失ひし犬は先づ此犬の家
に收容さるるのである。犬病院のあることは勿論である。犬盗人の手に落ちしものも
警察の手にて発見の場合矢張此犬の家に收容せらるるのである。犬の家には猫も共に
收容されるのである。一定の食料と手數料を出せば此處にて一定期間飼養してくれる。
旅に出る家庭などで犬猫を預けて行く人もあり。收容せられたる宿無犬にして、八日
内に飼主の知れぬ場合には適當の方法で殺してしまふ。現今は麻酔藥を應用して再び
醒覺せしめぬ方法を應用せらると言ふことである。

英國の犬は車用として使役することを許されず。犬を蓄ふには、一定の畜犬税を拂

はざるべからず。其中牧蓄用犬、盲人指導用犬、年齢六個月以下の犬等は畜犬税を拂ふを要せず。

獨逸にては猫を見ること極めて稀である。これに反し英國にては猫を有する家庭の多きこと殆んど日本の如し。犬と猫とはその仲の善きこと驚くばかりなり。相互に仲善く遊び戯るるを見ること決して稀ならず。猫が獨逸にて愛せられず、英國にて珍重せらるるは、恐らく猫が國民性に合ふと合はざるに因るものであらう。獨逸にては婦人と犬とは相離れ得ざるもの如くに見えるなり。

●●●●英國女の料理。倫敦の中流家庭では來客の爲め婦人が接待に忙しきを普通とす。いくら英國婦人だとして來客の場合には夫に任せ置くこと能はず。獨逸人などは英國人は上邊を飾ることに重きを措くこと甚だしきため、家婦の忙しきこと尋常にあらずなどと言へどそれほごにもあらざるべし。

英國の料理は比較的單純である。調理法も他國のものに比すれば單簡である。多く

は味をつけて煮す。卓上に運ばれ後、各人机上の食鹽、「カラシ」、「ソース」などを取りて自己の嗜好に應じて然るべき味を附けるのである。英國で多く用ひらるるは「ローズビーフ」、「マutton」、「野菜」、「チーズ」、鴈詰、魚等なり。英國の厨は獨逸などの如く料理の種類を取換へること稀にして一週間に同じものを三度も四度も食するを通常とす。「スープ」も用ひらるること甚だ稀である。獨逸では料理法は家政の重要科目の一として數へらるるが故に、中流以上の娘共は料理其他一般の家政を見習ふ爲めに、然るべき家庭に入り、若しくは家政學校などに通ふなり。英國にも料理實習學校などあれど料理法の單一なる爲めにそれ程念入れて學ぶに及ばざるもの如し。予は獨逸より倫敦に行きて英國料理が氣に入らず。獨逸料理店に行きし事、一再に上らず。幾度となく良家の婦人の手に成れる晚餐などに招かれしことあれど鹽や、「ソース」を加へて自ら味をつけると言ふ有様ゆる實際のよき味は出ぬなり。

英國の中流以上の家庭にては召使人割合に多し。家婦の勤勉に働かざる思ふべし。

然れども近來この風はますます廢れて召使の數は漸く減じられつつありと言ふことである。

英國の煖法。英國人が利益多き「ストーブ」を用ひずして今も尙「カミーン」(英語にて fire-side 又は fire place と言ふ)を用ひつゝあるは、國民の性によるもので、この性質は獨り「ファイア、ブレース」のみならず、他のものに於ても見ることが出来る。予は新建の家などにも尙且チャンと此「ファイア、ブレース」の設けられあるに驚けり。成る程「カミーン」を用ひざる場合には之を室の飾りともなし得ん。併し煖法としては極めて利益少し。室内に煙を燻すことは言ふも更なり。室の温まる度も極めて不平均なり。風強くして煙筒より入り來らば逆に煙を室内に散らして、宛然たる煙室と化せしむることあり。お隣りの獨逸などに利益多き「ストーブ」を用ひ居るに敢てこれを知らざるもの、如くにして不利多き舊きものを尊ぶ。英人はすべて斯くの如く保守の國民なり。進んで多くの發明をなし得る國民にあらず。

英國の小兒。英國は自由を尊ぶ國である。小兒にも餘程の自由が許してある。中等以上の家庭では小兒の爲めに別に室を設けられ、家庭内の小主人として大切にせらる。獨逸などでは小兒の名は悉く呼び捨てにせらる。召使の者も安じて小兒の名を呼び捨てにするのである。英國は然らず、小主人、小嬢は既に Master 又は Miss の尊稱を名の上に冠けられるのである。例へば Master Willie, Miss Katie の如し。baby は別に名を呼ばれず、our baby と家庭で呼ばれ次の baby 現はるゝに及んで初めて其名を呼はるのである。兄弟、姉妹の間では日本の如く兄さん、姉さんなど、呼ぶことなく悉く名だけを呼ぶのである。

獨逸には Du と言ふ一種の名稱あり、夫婦親族及び子供其他極めて親密の友人間に於て用ひらる。Du は英語の thou に當れど、英語にてはこれを單に詩歌及び祈禱の場合に用ふるに限られ、獨逸語の Du の如く汎く用ひられず。

英國人が小兒に自由を與へ、且小兒を大切に結果、衛生上の設備に就ても用意

周到に出来て居る。

英人は「カルタ」好きなり。英國民の勝負好きなることは既に他の條下に述べた。殊に冬の夜長には「カルタ」遊びにふけるもの多し、Whist 及び Bridge は英國人の好んで遊ぶ「カルタ」の一種である。賭けて勝負を争ふあり。只賭けずして英語の所謂 *Love* の爲めにするあり。

公開の場所では、獨逸の如く「カルタ」遊びを許されず。然れども例の俱樂部にては公然の秘密としてこの遊戯行はれつゝあり。而かも多額の勝負を争ふもの少からず。

外國人にして英國に来るものは、知らぬ人々と「カルタ」遊びなどすることは極めて危険なり。懷中を空にせらるゝこと少からず。停車場などにて「カルタ」遊びの客引をなせるものあり。うまく彼等の罠に掛けらるゝものあるが故なり。

在宅です。日本人が訪問の時間を空費すること、訪問時間を不規則に行ふことは、既に世界の人々が知るところである。「タイム、イズ、モネー」の故郷に於ては、時間を貴

ばるゝこと到底邦人の想像に及ばず。英語の *At home* とは在宅して客に應接するの意味なり。これにも種々の別あり、例へば午後及び夜間在宅 (*After-noon and evening at home*)、面會日 (*At home day*) 等の如し。人々によりて其度数に差違あるは勿論のことなり。例へば一週一回、二回、三回、少きは月に一回なるもあり。第何番目の土曜と日曜など、言ふもあり。指定日をして土曜、又は日曜日の午後を選ぶもの少からず、この場合に訪問せる客のうちには、多くは短時間にして用を果し歸るを普通とす。該家庭の知人にして親しきものも、茶、菓子、果物等の簡單なる馳走を受くるに過ぎず。六時には晚くとも客は去つてしまふのである。夜間 *At home* のものに至りては其數多からず。

夏期に大袈裟の所謂 *At home* を開かることあり。多くは庭内にて開かれ、餘興の主なるものは、音樂を通常とす。其他別に學術的、政事、美術等の専門に涉る會合の設けらるゝことあり。斯かる集會は夜八時頃より初まり、深更に及ぶを例とす。斯種の

を拾ふ
有拾

歐洲苦

これは歐洲戦争突發の際、ものせしもの的一部分なり。特にこのところに收む。

一、歐洲苦と戦争苦

文明が一定の度まで進むとそれにつれて異論な困難なものが生じて来る。群を抜いて延びたる獨立樹は、自然風に吹かるることも劇しくなる。

英國は富んだ國である。大きな國持である。處が向ふの獨逸では最近軍艦を造り陸軍を増して鷹牙を磨いて其勢力は段々増長して來た。これが癩の種となり苦の種となりかけて居た。

佛蘭西は普佛戦争の遺恨を晴らす爲めに鋭牙を磨き、どうでもこうでも其かたきを

撃たんと志しては居たものの獨逸の牙は日に月に鋭くなるばかりで、これが只管苦の種であつた。

陸軍を擴張し、海軍を増大し、其精英世界一と稱せらるる獨逸自己にとつても苦痛他の國に劣らざるものがあつた。世界に友なく孤獨の姿であるからである。

奧多利は近來衰連に傾き苦痛の増す計りである。

露國もお隣りの獨逸が發展するを苦に病み乍らも、軍備の擴張は出來得る限りやつて來た。

果然！ 果然！ 一國の苦は破れて戦争苦とはなつた。此戦争苦は實に歐洲苦である然り歐洲園は歐洲苦になつてしまつた。歐洲と言ふ一個の精巧な、廣大な大機械は今運轉を中止した。只一部分の軍部を言ふ處だけ活動して居る。此部分は設備はあつても常には大運轉を要しなかつた。一度運轉を始めると他の大部分が停止しなければならぬ程に大きな力を有して居るのである。

商業も工業も殆んど停止した。此停止は實に大きな停止である。人間で譬へて見ると口が利けなくなつたか、又は手足が動かぬ程の騒ぎである。

昨日までは盛大に運轉の輯をとつて居た商工業者も今日は見すばらしい討死をせねばならぬ程になつた。實際に自殺した者さへ中々多くあると言ふ。

大頭株が自殺したり、討死の姿であるなら職を失ひし小さな職人の苦しむことも當然である。

物價は騰貴した。日用品が高くなつた逆これを節するわけには行かぬ。失職の上に生活費が増して二重の苦痛である。頭の擧る方法が無い。

國は巨大の軍費の負擔を要する上に一國の興敗を賭して戦はねばならぬ。近頃某教授の計算する處によると加戰國の支拂ふ軍費を合すると一日一千萬磅に上ると言ふ。何ぞ眼の玉の出る程大きな額であるまいか。これを歐洲苦と名けずして何と呼ぶべきであらう。美はしき歐洲の花園が一朝にして苦界に化せんとは「タイム」の外に誰が知

つて居たであらう。

戦場では幾萬人と言ふ多勢の壯者が血を流しつつある。學者の豫言する處に據れば恐らく二千萬の軍人は動員されることであらう。而して其半数は死傷の運命に達するのであらう。これを歐洲苦と呼ばずして何と名くべきであらうか。

歐洲戦争は迎も長くは連続しないと言ふ。經費が足らぬからだと言ふ。何れにしても戦争の組立が大きい丈けに加戦國の受くる損害は大したものである。戦争は止んでも戦争の傷が癒ゆるには長年月を費する。其外に軍備擴張が一層劇しくなるに相違ない。大きな負擔である。歐洲苦と言はずして何と名くべきであらう。

若し歐洲戦争が勝負相譲らず徒に長く續くやうのことであれば費用まけをする國が出来ぬかも知れぬ。勝負が定まるとすれば、負けた方の往生は徹頭徹尾まで行くかも知れぬ。斯くて歐洲苦は世界苦に轉ずるかも知れぬ。恐ろしい事である。

二、歐洲戦争の開始

●歐洲戦争の開始はまるで捲土重來の有様で殆んど電光石火的であつた。一度獨逸の緊張せる關係が報せらるるや、何人も全歐洲戦争を豫想した。豫想はしたが、斯くまでに早く幕が開かうとは思はなかつた。

●大英國に移住せる獨逸人の數は一時的滞在の者をも加へて約十四萬と註せらるる。自由に生活せるものは、直に本國の獨逸へ歸つたけれども、職を有せるもの、若しくは自ら商店を所持せるもの等に至つては勿論そんなに早く片づけて本國に歸ると言ふわけには行かない。

●獨逸政府は既に露國、佛國、白耳義に對し宣戰の布告をなした。次で英國も獨逸に對する宣戰を公にした。此間の時日は極めて迅速であつた。これより先き大英國の諸方にある獨逸人は先づ倫敦に集つた。倫敦に於ける獨逸大使館は數千の人に滿された。

既に歸國の途が塞がったからである。一寸向ふの岸へと言ふ程の間でも、途が塞がれば遠いと同じ事、旅費を持たぬものが既に多く居た。

●そこで米國の大使が種々と骨を折ることとなり獨逸大使は多數の同胞を米國大使に任じて愈々本國に引揚げた。米國大使が特に米國船を用意し獨逸民を本國に歸航させることにした矢先、英國側の警察が来てこの航海を中絶させた。

●今は既に自分の敵國である。英國民は大國民精神を有して居ると言つても、敵國の人を店に雇入れることは決して致さぬ。金のないものは其日から路頭に迷はねばならぬことになつた。

●多年の經驗と辛苦とを重ねて經營して來た獨逸人の商店も、今は一刻も猶豫の出來ぬ時機に逼つた。昨日まで盛大に營んで居た銀行、會社、商店も今日は忽然としてこれを引揚げねばならぬことになつた。僕は獨逸銀行や、其他の商店、會社等の引揚を目撃して一種の感概に堪へなかつた。

●戰爭の豫想高まるにつれて、獨逸本國から英國に送らる大新聞の數は一時に幾萬と言ふ大多數に上つた。英國が一度宣戰を告布するや、英獨の間は遂に杜絶して全く兩國間の事柄は解からなくなつてしまつた。

●斯くて獨逸は遂に四方包圍の中心に座することになつた。難事中の難事である。新聞は獨逸軍の敗勢を頻りに報じて居る。白耳義の軍隊にやられて退却の止むなきに至つたと言ふことである。

●獨逸、露國の國內で、國民が非常に騒いで居ると言ふことであるが、英國の民は、中々騒が無い、落付たものである。

●英國には食用品が十分でない、全使用料の五分の一しか本國で産出しないと云ふのであるから溜らない。物價が既に騰貴し始めた。若し不幸にして戰爭が長く續けば物價の騰貴と食料用の缺乏の爲めに悲惨な状態が一層劇しくなることであらう。此關係は併し獨逸に於て尙ほ劇しいであらう。

三、歐 腸 斷

歐洲戦争を名けて歐腸斷と言ふ。歐洲の胃腸は今切斷の苦みを受けつつありと言ふの義なり。空前の歐洲苦である。

最近獨逸の文明は世界の王とも稱せられ。陸軍も海軍も其精練なる點に於て世界第一位を占むと呼ばるる。陸軍は戦時に於て優に六百萬の軍を動かし得ると言ふ。併し其有力なる獨逸は歐洲戦争の焦點となつた。四面包圍のうち在り。強しと自ら呼べる國でも敵軍包圍の中に在つては必ずしも安心が出来ぬ。興敗の別るる六道の辻に立つては、好戦王と呼ばるる「カイゼル」でも蓋し一方ならぬ苦痛であらう。

獨逸の敵は多勢である。併し獨逸に向つて油斷して掛る程大膽な國は無い。露國もハカトくしく活動し得ないやうである。獨逸の北より西に廻り南に折れて佛、白、英の陸軍が合同して獨逸軍に方つて居る。獨逸側の死傷數は英國に居て知り得らるるも、

佛、白、英側の損害は公にせられない爲め比較研究は出来ない。併し世界に優れりと稱へらるる獨逸の軍隊に當ることなればあまり小兒扱ひには出来ぬ。矢張苦痛である。要するに此歐洲戦は各加戰國共に斷腸の思を致して居ることは疑のない處である。國の苦痛は蓋し民の苦痛である。苦の民痛は蓋し國の苦痛である。歐洲と言ふ大きな機械の運轉が停止して、其上に逆運轉を初め出した。歐腸斷と言はずして何と呼ぼう。

歐洲戦争に費さるるところの軍費は合して一日平均千萬磅にも達すると言はるる。吐血の思ひではあるまいか。歐腸斷とは此事であらう。

歐洲の青年は今此歐腸斷の犠牲として強健なる肉と靈を草葉の蔭に果しつつあるのである。歐洲は文明を自ら生み、今自ら文明の爲めに殺さしつたのである。刺されつつあるのである。歐洲の文明は歐腸斷の祖先である。

戦争は相果つるの期あるべし。然れども腸斷の痕は久へに残ることであらう。

四、歐洲戰爭の損害

●緊張に緊張を重ねたりし歐洲の外交は、遂に破裂した。歐洲全土は遂に慘憺たる戰場と化した。嗚呼文明の花咲く歐洲全土は千軍萬馬の驅逐する恐ろしい戰場に化した。こんな悲惨なことが又と世にあるだらうか。歐洲の樂園は遂に血腥さき修羅の巷になつてしまつた。

●最近プロフェツソル、チャールズ、リツチト氏、歐洲戰爭に因つて起る處の損害に就て自己の意見を公にした。氏は言ふ。愈歐羅巴戰爭が起れば、二千萬の軍人が動かねばならぬ。其中千萬人は戦場の露となつてしまふであらう。

●軍人の輸送、糧食、武器の費用、町村の損害、間接と直接とを問はず、各國がこれに費す處の額は、日々千萬磅に上るのであらう。リツチト氏は此計算を次の如くにして見積つて居る。

●軍隊に用ゆる食料品二百萬磅、馬匹飼料二十萬磅、給料八十萬磅、港場職人給料二十萬磅、動員費四十萬磅、武器、食料品の輸送八十萬磅、歩兵に要する費用八十萬磅、砲兵費二十五萬磅、軍艦砲費七萬五千磅、武器八十萬磅、衛生費十萬磅、軍艦航海費（一日六時間の割）十萬磅、税費額二百萬磅、貧民保護、町村の損害等百五十萬磅、但し此計算は、戰爭によつて起る處の物價騰貴を見積らす。

●若し戰爭が三十日間連続したる時は、陸海軍の軍用品の三分の一は損害を受ける。然るときは、一日平均百乃至百五十萬磅の損害が加はつて来る。

●右の計算は最低に見積つたものだと言はる。それにしても、歐洲全土の財産が日々千二百萬磅づつ消へてしまふわけである。何と恐ろしいことではあるまいか。

五、武装せる倫敦

果然倫敦は武装してしまつた。

英國の如く陸軍の微弱なる國で、其陸軍を外國に送らねばならぬと言ふことは、中
中の困難である。英國の陸軍は今佛國と白耳義に送られつつある。

英國では一面には義勇兵を募り一面には軍事金を募集して居る。

倫敦は今兵に満ちて居る。公園例へばハイード、パークの如きは練兵場になつてしまつた。

市中の要所々々には軍人が立つて居る。例へば郵便電信局の如き、銀行の如き、これ
なり。巡査の數は非常に増した。到る處に巡査が居る。

倫敦の如く世界中の人々が集まつて居る場所に於て、殊に敵國の人々が多數に居る
場合十分の警戒を要することは勿論である。何しろ敏捷な獨逸人のことであるからご
んなことをするやら解からぬ。

戦争の影響が交通機關に及ぼす事は申すまでもない。郵便集配の數が減じた、交通
の機關が減じた。馬が少くなつた。自轉車や自動車が非常に減じた。戦時用に當てら

れたからである。車掌にも婦人がなると言ふことである。

婦人のうちには今銃の使用方を學んで居るものが少からずあると言ふ。

六、彈丸雨下の歐洲

歐洲は世界の花園である。世界の樂園である。之が一朝にして彈丸雨下の修羅場に
化せんとは神ならでは知り得なかつたところである。變れば變る世の中である。文明
の戦争は一字形の戦争より十字形の戦争に移つた。氣、地、海の戦争である。

「彈丸雨下」と言ふ語は今日の歐洲戦争には好適の文字である。實際に彈丸が空天幾
千尺の處より雨下するのである。横から來るものは逃げもし得らる上から落ちては逃
場所がない。

日本では恐ろしきもの四つあり。地震、雷、火事、爺と言ふ。歐洲の戦争は此日本人
の恐るべき四の要素が悉く備つて居るやうに見える。

見給へ砲彈と水雷は海に於て、局在性地震を演出しつつある。彈丸は雷の如くに天より飛下しつつある。火事も盛に軍さの塲で起りつつある。偕て最後の爺に當るものは何だらう。人は呼んで獨逸皇帝を好戦王と言ふ。或は好戦爺かも知れぬ。

商業も工業も停止の姿である。科學もそれにつれて進歩の足を停める。職を失ふものが増す。國庫の負擔が山程に高くなる。戦争程悲惨なものがまたと外にあるだらうか。

文明は人間が造り出したものである。人間が幾千年の長日月を費して生んだものである。そして今は此文明と言ふものの力を利用して人間互ひを殺しつつあるのである。戦争毎に幾萬と言ふ壯者が戦場の露と消えつつあるのである。恐るべき矛盾ではあるまいか。

人間は高等の動物と言ふ。其高等の動物が構成した國家が戦争を宣して同性の構成せし國家を傷けんとす。時の罪か、人の罪か、抑もまた自然の戯か？

いくら歐洲でも世界の花園を永久に獨專することは不可能であらう。文明の花も、遊園の花も、一度散ることに於ては同然である。今回の歐戦は、落花の前徴ではあるまいか。歐洲自ら造りなせし花園を自己の手で荒しつつあるのである。これが自然の成行きから生じた運命ではあるまいか。

國を支配し、自然を左右する運命の手程大きく且力あるものは又と他に見出すことが出来ぬであらう。

七、文明と戦争

古の戦争は人と人との組打であつた。今日の戦争は機械の戦争である。人力は機械の後ろに在つて機械を働かせることとなつた。

往事の組打的戦争に於ては一時に多勢の軍を切りまくるわけには行かなかつた。今日は砲彈がある。機關銃がある。おまけに雷的化物の飛行機應用爆發と言ふことが行

はるる。往事の戦争にも勿論戦略はあつた。今日は寧ろ戦略よりも機械略である。敵軍の所持せる機械以上の機械があれば、戦は勝に歸する。敵軍に飛行機なく此方に飛行機ありて之を應用し得ればそれによつて勝つことが出来る。

文明と言ふものは、戦争を一層悲惨ならしめる。見給へ歐洲戦争の開けてより漸やく二旬に満たぬ今日既に幾千萬の人命を奪つたではないか。歐洲戦は尙ほ以後大戦が幾度か行はるるだらう。其度毎に幾萬と言ふ人が死ぬるのであらう。文明は時に人を喜ばしめ、時に人を苦しましむるものである。

歐洲戦は實に一名文明戦である。第二十世紀の世界戦争である。文華を競へる巨國と巨國の決戦である。

獨逸は文明の利器を應用して世界政策を行はんとして居るのである。艦隊の數世界一なる英國に於てすら獨逸を恐るること甚だし。一にこれ文明戦たるが爲めである。戦争の禍は文明の進むに従つて一層其度を増すのであらう。英國には居残れる獨逸

人尙ほ五萬人を算すと言ふ。或る者は水道源をなせる湖水を毒して數萬人を殺さんと企み或者は他の冒險なる方法によりて幾千萬人を斃さんと謀りしと言ふ。非武器の戦争、科學の戦争、何と恐ろしいことではあるまいか。

文明よ！汝の手は柔かにして温きこと天使のそれに似たり。されど一度毒を持てば鬼神の怒れるにも似たり。

歐洲は多年の歳月を費して文明と言ふ愛兒を産みなし。今は自ら此愛兒の手によりて思ふ存分に苦しめられつつあり。歐洲戦争の終るは何時かは解からぬ。併し若しこれが半歳又は一年に涉らば、歐洲の全土より青壯の人命幾百萬が葬らるのである。今度の歐洲戦は恐らく一、二個國に致命傷を與へる事であらう。歐洲全土にとつても大きな負傷である。瘡痕は或は永へに消えぬかも知れぬ。

歐洲戦争の終ると共に歐洲の戦争的文明は茲に一大革命を致して恐らく長足の進歩を見ることであらう。

八、歐洲戰役雜話

●英國の宣戰を公布するや英國に在る獨逸人は外國人と言ふ名稱より轉じて、敵人と見做されるに至つた。同時に在住の獨逸人に就ての規定が變更された。規定に従ひ届出を怠りしものには百磅の罰金又は六個月の禁錮に處すと言ふのである。婦人も素より男子と同様に處置せらるるのである。英國に在住の獨逸人は十四萬にも上ると註せらるる。倫倫に居残りしもの丈けでも尙ほ四萬乃至五萬人を數ふると言ふのであるから、届出を受付くる警察官の繁忙は非常なもので、朝の十時かり夜の十時に涉り、處によりては日曜も事務をとつたと言ふことである。中には一日に二度も三度も警察に出張するの要ありしものあり。英語の智識に缺けたる爲め種々の面倒を見し人もあり。一寸滑稽なことには規定だと言ふので貧しい老婦などに「自動車を持つて居りますか」「飛行機を所持しては居りませんか」などと一々質問をあびせかくる事であつた。

●最近英國に於て歸化せし獨逸人の數は非常に多數に上つた。然るに只今ではある事情の爲めに歸化することを許可せられぬことになつたので今は何れの方面にも切り抜ける道がなくなつてしまつた。軍籍に在る獨逸人は捕虜として特別の建物内に軍隊の警備の下に收容されて居るのである。

●獨逸國人にして身元調べを受け、且現住の家屋調べを受け、中には彈藥類を所有して居たものもあると言ふことである。

●八月十三日、英國の下院で戰事費として一億磅の豫算案が提出された。わけて第一に必要なは軍人の増加である。第一着に五十萬の軍を編成せんと言ふのである。

●此議案の提出者はアスクイス氏であつたが、氏は此機會を利用して獨逸に宣戰を下すに至つた顛末を説明し、英國が獨逸に戰を宣したのは、外に最早とるべき方法がなくなつてしまつたからであると言つた。

各種の政黨員も悉く一致して此議案に賛成をした。

●英國殖民地は人の知る如く世界の到る處にある。一度歐洲戦争の開かるゝや此殖民地より母國に對する應援を申込んで來た。カナダは二萬人を應援隊として既に召集した。カナダの政府に義勇軍として出征を願出でしものは十萬人を超へると言ふことである。其他濠洲、ニージランド、印度、南亞弗利加等の政府よりも應援を申込んで來た。

●戦役に關する新聞記事が多岐にわたることは申すまでもない。新聞は實に秋の收穫時にも似て盛に賣られつゝある。時には飛んでも無い記事が掲載される。英國の新聞は重要な記事の標題をビラに印刷してこれを至る處に掲げて道行く人の目に觸るゝやうにする。路上には到る處新聞賣子が居る。新聞の記事は概ね敵軍に關するものである。獨逸の新聞を手にする方法があれば、兩者相對照して面白いと思へど今は兩國間の交通機關悉く中絶して何事も知り得られぬ。

●英國が一度宣戰を公布するや在住の獨逸人に關する規定は變更された。曰く住居の變更を届くる事、曰く届出の際中何か變動を生じたる場合、逐一届出づる事、警察

の許しなくして現住地より五哩以上の地に赴くべからざる事。警察の許可なくして左の物品を所持する能はざる事、武器、爆發物、石油、「アルコール」、「ベンチン」、其他發火の恐れある物品、記號器、傳書鳩、自動車、飛行機、暗號。

●以上の條件に觸れしものは百磅の罰金若しくは六箇月の禁錮に處せらるべし。又若し以上の事件を隠したるもの、或は之を知り乍ら届け出でざるものも右と同様に罰せらるゝ事。

●右の事件に關して警察の手に捕へらるゝ獨逸人の數は非常に澤山にある。英國より獨逸に逃亡せんとして警察の手に捕へられ、オンツピヤの收容所に在るもの既に二百人以上を數ふると言ふことである。

ポーツマスにて警察の手に捕へられし獨逸人は百五十名に上ると言ふ。

遂に歐洲を去る

○僕は今例により通信の筆を執る。蓋しこれが歐洲より送る最後の通信となるでせう。思へば國を去つて四年目の夏を僕は實に此歐洲の天地で迎へたのである。四年と言へば一寸可なりの歲月であるが今顧ると僕の爲めには實に矢の如くこの月日が走り過ぎたやうに思はれいよ／＼住み馴れた歐洲に別れを告げることゝなつては何だか名残が惜しまれてならぬ。

●在歐中には種々の出來事が祖國にあつた。明治天皇の崩御續いて皇太后の崩御、海軍事件、對米事件等の起る度毎に一種言ひ現し難き感慨が幾度か僕の小さき頭腦を往來した。嘗に往來どころではない。或時はよくも破裂せずすんだものだと思ふこともあつた。日本の出來事を歐洲で知る場合には世界の反響として見ることに

が出来るからである。

●世界の出来事として、バルカン戦、續ては今回の歐洲戦争。後者は僕の爲めにも大障碍を齎らした。僕は歐洲を去るに臨み歐洲を横断して舌の使用を試んと思ひ立ち諸國よりの招聘の需めに應じ其「プログラム」も既に出て居た。活動の舞臺は巴里、獨逸、埃國等であつた。今は此計畫の遂行は、絶對不可能となつてしまつた。そこで愈愈倫敦より海路祖國に向ふ。戦時の海上は危険たるを免れぬ。併しまさかのこともあるまい。もしあればこれが僕の絶筆です。

●諸君外國に永く居ると自然祖國を理想化するやうになる。或人は然る後歸朝して大に失望したと自白して居る。僕も同じ運命に陥りはせずやと今から心配して居る。若しこれが杞憂であれば最上の幸福である。

●歐洲に長く居ると自然知らでもよきことが目に見へたり耳に觸れたりする。併し一方には知らねばならぬことの益々多きを發見する。西洋の眼を以て東洋を見ると風俗

や習慣に解釋の出来ない程に滑稽なことがある。外國人の手になりし旅行記などを讀んで見るとこれがよく解る。丁度これと同様日本人が西洋の事物を觀るときに日本式の眼で判斷すると西洋人が聞いて吹き出す程の結果を持つて來ることがある。

●僕はほんの一介の書生で、見識にも才學にも貧しい只區々たる日本の青年であるが故に決して『西洋通』などと言ふエライコトをふりまくやうな野心は持ちたくてもない。併し小さな頭の中に常に何か溜つて居てそれが本人を苦しめて居る。樂しませる分子は到つて少ない。『祖國を如何にせん』と言ふ一個の中心が其頭中をかき交せて居る。國の爲めに力を盡し得る程のもので無いことは本人も知つて居る。知つて居りながら始終此感考が頭を往來して止まないのは、日本と言ふ生れ故郷を外にして、他國から見ると其外國の有せる缺典の輪廓が一層明瞭に見えるからである。勿論特徴點も同じ理由で明かに解る。

●僕は數十回に涉り日本の新聞、雜誌等に通信を致したが、其内容はホンの見聞の一小

